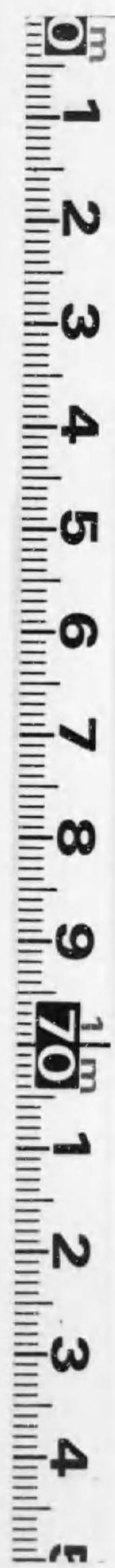


533

103

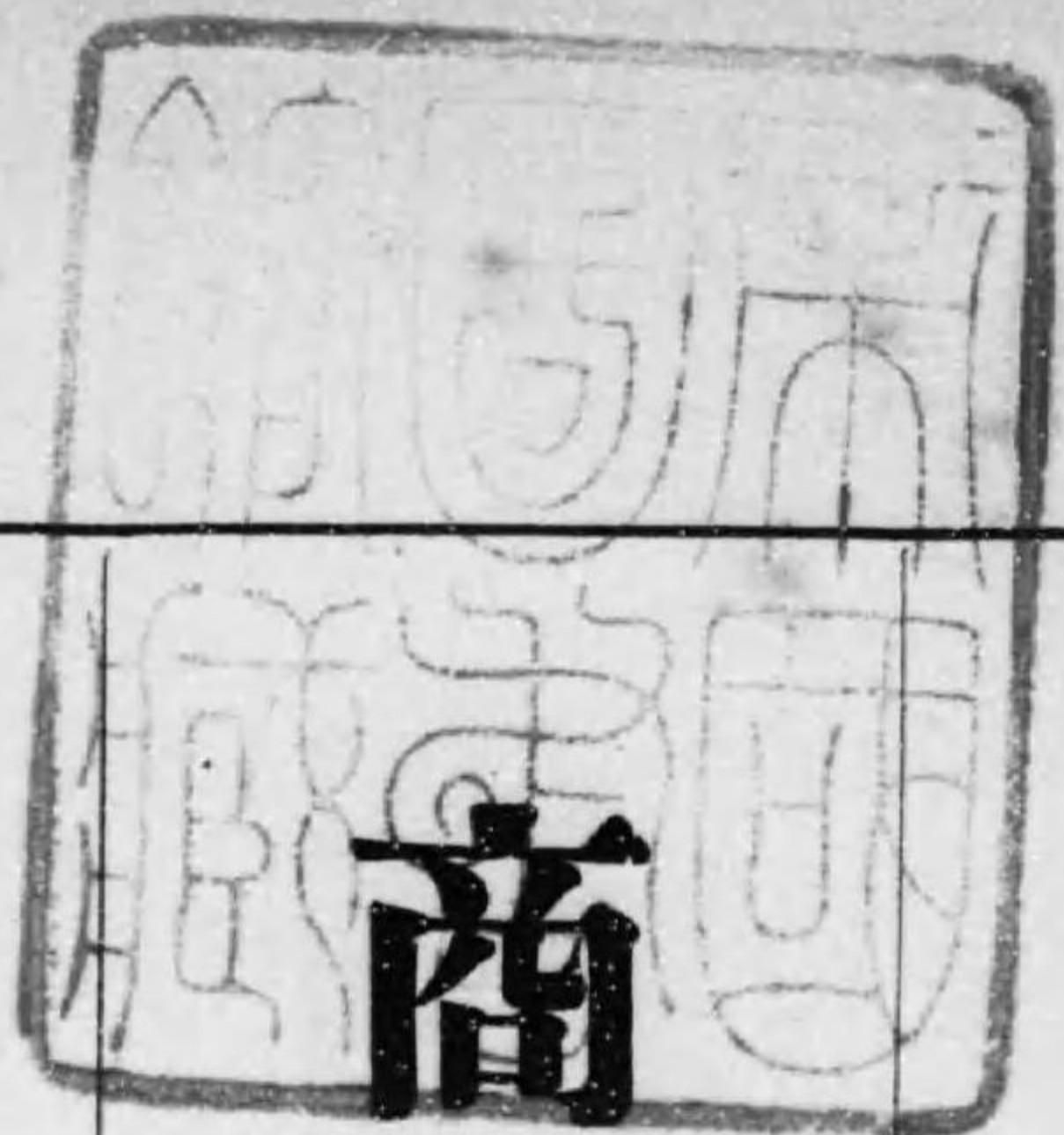


始



間宮英宗老師著

商機と禪機



商機と禪機

嵯峨間宮英宗老師著

淺井泰山堂

大正
14. 9. 28
内交

緒言

宇宙の眞理と云ふものは清風匝地何時何處にもある、有るが然し其の眞理の大機に投じなければ、眞理を體得し獲得すること
は出来ない。

金錢もまた常住不變の所有者と云ふものはなくて、元より通貨だから十方に普遍して、金色燦爛到る處にある、有るが然し其の金錢の大機に投じなければ、金錢を收得し獲得する事は出来ない。

我禪宗で眞理の大機に投じたのを悟りを開いた精神的富貴の人と云ふ、商人が金錢の大機に投じて儲けたのを物質的富貴の人と云ふ、眞理の大機に投ずるためには、多年地を掘つて青天を

求るが如き愚をも演じて色々苦勞に苦勞をかさねて眞理の上の富を得るのである、何れにしても機と云ふことは同一味である、と云ふ處より、禪の立場から商機を論じて見たのである、禪機を體得した人は商機が體得の出來た人、商機に投入した人を禪機に投入した人と同じである、と云ふ點から、野僧の所信を講説したものである、是れに依つて青年商業家の一人でも商機を體得することあらば誠に實業界のために祝福する次第豈に禪機に投入せよと云はんや、山僧元より金錢の價値をしらず、又商機の如何をしらず、たゞこれ禪機。

嵯峨渡月松畔臨川精舎に於て

青 龍 道 人

商機と禪機

目 次

商業の眞意義……………一

修養なき商人——順調な時に注意せよ——商人の立場——徳川時代商人の價値——なせ武士は尊敬されたか——國家は既に一變せり——商人の努力すべき秋は來れり

商機と禪機……………一七

商の字義——機の字義——何が爲に金が慾しか——如何にせば金儲があるか

不二の商機と禪機……………三二

禪宗真理の代名詞||禪僧の投機、蒙山異禪師||毒峰善禪師||商人の投機||商人の金、禪僧の道||金儲の機は何處にもある||スヒンクスの話||商人の魂||禪機の妙句
時節因縁を觀ずべし……………六二

家康と信長の性格||進退に去就||岡本米藏氏の成功||萬事に機會あり
何をか活動の原動力と云ふ乎……………一〇八

至誠||人間は嘔吐動物||自己に向つては嘔言なし||シンセラ||鼻と髪のない夫

如何にして機會を體得するか……………一五四

啐啄の機||不平の習慣||ムールの蠻人

商道と佛道……………一七一

賣つて喜び買つて喜ぶ、佛道商道の一致||何をか道と云ふ||金儲けを商法の根本原理とする勿れ||商人は商人臭くせよ||如何にして道を通る||利益は近きにあり||四ッ手のランプ||無我になれ||夢窓

目次(終)

國師と武士||無我になれとは馬鹿になれ
 と云ふにあらず||心の持ち方一つ||修養
 を積み||足ることを知れ||不満の習慣||
 成功の秘訣は學問上にて得らるゝものに
 あらず||大事業成功の動機

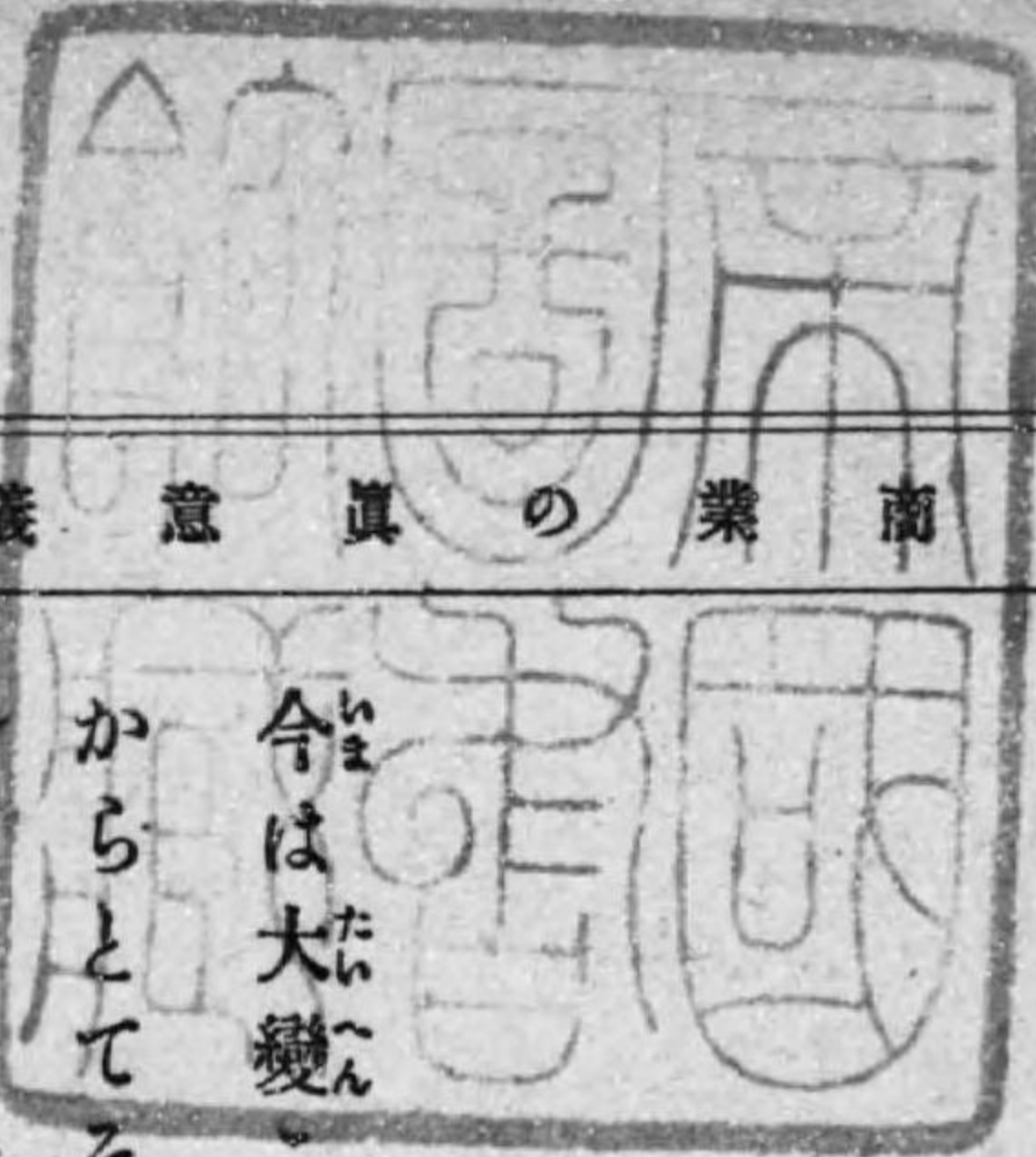
商機と禪機

間宮英宗著

第一 商業の眞意義

□修養なき商人||商人の立場

今は大變この金の儲かる時節であるそうだが、然かし如何に儲かつた
 からとてそれが直に諸君の所有と云ふのではないから詮らないかも
 知れんが兎角人間と云ふものは少し順境に向くと直に調子づいてい
 けない。エライどうも済ました顔をして私の話を聞いて居られるが
 皆さんの顔を見ると、丁度婚禮の席へ乞食坊主が来たやうだ、何故



かと云へば、お金かねが儲たくわかつて順境じゆんきやうだと、自然しぜん人に對たいして剛慢かうまんに成なるものだ、何なんんだ宗敎しゆきやう家の話わかと云ふ輕侮けいぶの顔附かほつきが見みえる、此この前まえ始はじめめて此會このくわいへ來きた時ときの顔附かほつきと、今日けふの諸君しよきんの顔附かほつきとは顔附かほつきが違ちがふ、幾いくら主人しゆじんが金かねを儲たくわけたところ、店員てんいんや丁稚ていぢの人達ひとたち迄までの鼻紙料はなぢりやうが、爾そんなに餘計よけいに貫ぬへる氣遣きづかひはない、けれども何なんとなく境順じゆんきやうだと、調子てうしづく。然しかし金かねが這入はいつた時ときに調子てうしづき、景氣けいきの好よい時ときに調子てうしづく者は、少すこし不景氣ふけいきになると直ただちに青菜あそなに鹽しほみた様やうな面附つらつきをするものだ、それでは面白おもしろくない、それが所謂いはず修養しゆやうのない商人しやうにんの本ほん色しよくである。大おほ阪邊さかへんでも此頃このころは大へん調子てうしづいてきたそうだが、是これは只生糸ただいきいとばかりではない、染料せんりやうを取扱とりあつかつて居ゐる人ひとや、鐵類てつるいを取扱とりあつかつて居ゐる人ひとや、又船またふねを取扱とりあつかつて居ゐる人達ひとたちで神戸かたべや大坂邊おほさかへんの調子てうしづきかたと云ふもの

はなか〜豪えらい勢いきほひだ。さうかと云ふと、中なかには又損またそんばかりして、顔色かほいろを變かへて居ゐる人ひともある。鐵てつなどは非常ひじやうに儲たくわかつたと云ふが、此間このあひだも或銀行あるぎんいの支配人しはいにんから聞きくに、鐵てつが儲たくわかつたと云ふけれど、決けつして其鐵そのてつは只商ただあきなひさへすれば必かならず儲たくわかると云ふものではない、それは矢張やはり鐵類てつるいを仕入しはいるべき時ときにドンと仕入しはいれてあつて、それを賣切うりきらないで持もち耐たへて居ゐつた人ひとが、土藏どぞうの中なかから擔出かついだすので、丁度銀行ちやうどぎんいに預あづけて置おいた金かねに利子りしが附つくやうなものだ、儲たくわかつたと云ふのは今いままでの預金よきんに利子りしが附ついたと同じこと、利子りしが儲たくわかつたと云ふだけのことである。決けつして今いままでの倍ばいになつたの、三倍さんばいになつたのと云つて騒さわぐほどのものではない。今假いまかりに一本ほんの庖丁ほうちやうが十五錢じゆごせんするものが以い前は五錢ごせんで買かへた、さうすると一本ほんに就ついて十錢じゆせんと云ふ大おほき

な利益があるやうであるが、その實は長らくの間土藏の中に抛り込んであつたものを、持出したと云ふまでのことで恰も郵便貯金をして置いたも同様なものである。それが五錢で仕入れた庖丁が今十五錢になつたから、無暗に儲かつたと、雀躍するのは馬鹿の骨頂である、それだけのチャンと利子に對する元金が預けてある、是れは銀行に預けて置いても矢張り相當の利子は附く、十年十五年の長い間土藏の中にあつたものが、少し位價が高くなつて出て來たからと云つて、之を儲かつたくと云ふて喜ぶほどの價値はない。之は如何なる種類の商業に於ても同じ道理である。損益は時の得失或は機運にも依ることなれば、克く順逆の二途に處して堅固な態度を保つことが肝要である。夫れにつけても丁度一昨年頃だつたと思ふ。私

の友人勝野某は多年の經驗ある製絲家でありますが彼世界戦亂の當初生絲の相場に大變動を來たして一日機械を運轉して職工を使役すれば毎日二萬圓以上の損害である利益のみを目的ならば片時も早く休業するが自己の利益である、けれども製絲其自身が目的とすれば國家のため社會のため飽迄奮闘して多くの職工の人々をも安堵せしめ、此際は一己身の利益を犠牲にしても平常の如やり通す決心だと言われし故私しも世の慈善てふ事は只人に物を施すのみが慈善ではないから活た慈善事業と思つてやるがよいと御話した事がある一昨年迄に持耐へずに倒産した製絲家も随分ある中に、切ない瀬戸際を堅忍持久して今は又大利益を得た一人であると思ふ、爾う云ふ實例に照合して考へてみると少々計り順境におふて金を儲けた處が決し

て油断してはいけません、儲かつた時はどふでも宜しひが、儲かる時があれば、又必ず損する時が来るに極つて居るから景氣のよひ順境の時に宜しく誠慎恐懼深淵に臨む態度が必要である。

□ 順調な時に注意せよ

この經濟界の順調な時、手を打ちさへすれば利益があると云ふ場合にその利益した金をば、如何なる方法にて使つて置けば、不景氣の時に困らないで済むかと云ふことを、今の内より注意しなければ、悲惨な不景氣が来た際に、平然として笑つて暮すことは出来ない、斯んな景氣だから宜い、斯んな景氣だから宜いと云ふが、同じ景氣は何時まで持続する譯のものではない、又如何に不景氣だからと云

つて、不景氣が何時までも長く続くものでもないだから景氣の順逆に依つて一々自己の本領を顛倒して冷靜なる本心を失するやうなことではいけない、私共のやうな利害關係のない立場から見ると、世間の人達が儲かつたと云つてピン／＼跳廻り、損をしたと云つては青菜に鹽の顔附をするのがよつく目に見える、明らかに見える、誰でも皆な錢の儲けたくない者はあるまい、錢の欲しくない者もあるまい、皆金が欲しさうだ、丸で金貨か紙幣の化け者みた様な面附をして居る、けれども金さへ懐へ這入れれば宜いと云ふのが人間の能事ではない、金には金の權威がある生命がある之を心得ずして金を欲する人間は寧ろ萬物の靈長たる人間になる必要を認めぬ、速かに造幣局の機械か、金貨を入れる澁紙袋になつた方が餘程氣が利いて居

る只金を儲けるばかりが能ではない。儲けた金の活用と儲けるに就いての手段とが善良でなくてはいけない。實際、商法家たる方は本當の商業の道を守つて、只金さへ儲ければそれで商法家としての成功であると思ふことは云はれぬだらうと思ふ。

□ 商人の立場

商業を商人の私利的立場より觀たならば、營利の目的を以て財貨を買入れて、之に加工せずして他に賣出す所の職業である、又國民の經濟的立場から見たならば、生産者と消費者との間の交換を媒介して、需要供給の適合を謀る所の職業である、故に商業は財貨の交通を助くる機關であつて、生産の消費を媒介したり、或は又、一地方

の剩餘を以て他地方の缺乏を補ふと云ふ如き、又不要な時に買ひ置きて急要の時に賣るなど、皆是れは世を愛するものばかりであるから、有形無形に國家を利益する事は頗る大きいのです、若しも今の世から商業を取り除いたならば、多くの人は皆太古原人の不自由な生活に復らねばならない、吾人が生を安らかにするは之れ實に商業の賜であると思はねばならない、如斯く、商業は人を益し、國家を利するものであるにも拘らず古來我國の通弊として商業を卑むものあるのは商業の其れ自體にあらずして商人其の人にあるのである、けれども又、假令賤しむべき品性の人が商業に従事してゐたとしても、一般に其の職業までも卑むのは、大いに誤れる見解である、漢書に曰く、「貨は國の本なり」と、唐書に曰く、「財は國の命なり」と、賈誼曰

く、「積貯者天下之大命也」と、皆な貨殖其のものを以て卑むべきものとはしない、孔孟の如きも、大に天下國家を富ますの道を講じたのである、唯々士君子は恒に天下國家を以て念とするものであるから士君子が唯々利己の爲に貨殖營利を事として、自己の本分たる天下を忘れるのを卑むべきものとせしのみである、士君子の營利貨殖と云つても、其の結果が徳を傷ふまでに至らなかつたならば決して咎むべきことではない。公益の爲に消費せんとして貨殖するは、武士が君に忠を盡すと寸分其の功に於ても軒輊はない、又此れを以て親を喜ばす爲に用ひたなら立派なる孝道である、況んや今日は國家が歳出の多きに困み、國民が生活難に苦しむの際であるから、多年の蓄財を出して之れを救済するのは、誠に愛國心の發露といふべきで

ある。斯の如く意義あり權威ある正々堂々たる商業が行はれなば、營利貨殖と仁義道德とは必ずしも相反するものではなくして、却つて相併行し得べきものである。此れが眞個に修養ある商人の立場であると思ふ。

□ 徳川時代商人の價値

遠く徳川時代の商業を考え見るに、商業家の如きは「素町人」、てふ言下に、無量の輕侮を受けて、社會の下層に沈んで居たのである。従つて、商業家が身を社會に寄することは、甚だ不愉快で且つ甚だ危険であつた。故に商業家は社界の輕侮及び外界より亨くる不平不快を回避すべく相率ゐて妻子團欒せる一家を安全なる城廓とも慰安

の樂天郷とも定めて居た、而して此間に於て商業家は更に社會の輕侮を招くべき罪惡の種を醸成したのである、何故かと云ふに商業家は一身一家を樂天地としたる結果、遂に一身一家ある事は知つて居るけれども、他人あり社會あり、國家あることを忘れる様になつた只目前の小利を追ふことばかり急いで、永遠廣大の利あることを知らない爲に、己を利せんが爲には同業相陥し入れ或は言葉を巧みにして人を瞞着し、社會國家を毒する如き行爲を敢てしても恬として耻ぢざる如き商人根性なるものを形造つた。遂に商賣かたきと云ふ思はしき俚諺まで出來たのである。

□なぜ武士は尊敬されたか

當時は武士獨り權勢を占め、武士獨り横行し、そうして武士獨り社會の尊敬を受けたと云ふのは、又是れ何等に起因するかと云ふに、武士は當時人としての職分を解し、己を知り、家を知り、國家を知り、社會を知つて居た、加之當時の所謂社會國家の爲には、名譽をも捨て、財産をも抛ち、妻子をも捨て顧みず、其ればかりでなく人として最も尊重し愛惜する生命をも捨て義に就くと宛ら家に歸へるが如き觀念を持つて居た。爲に當時に於ける武士は人としての理想となり社會の尊敬を獨占したのである。之に反して當時の商業家が社會の下層に沈んで其の爲す所は只自己本位のみにして、自分さへ儲かればよい、と云ふ卑劣なる黄金萬能の主義を抱く所謂拜金宗の信徒であつたから商業家なるものが當時の人間の念頭にだに上ら

なかつたのも最である、けれども國家の有様は已に一變して來た。

□ 國家は既に一變せり

昔時の所謂士農工商の階級制度は打破せられ、遠く五十年前の舊夢となつて、今は廣く世界萬國と交りて相往來し、四民は法律の前にては、平等に其權利を附與せられ義務を負擔する様になつた。夫れ故に、昔日の武士が去つて商業家となつたものもあれば、商業家が去つて、軍人となつたものもある、農の工に轉じ、工の商に轉ずるものや、その他同じく商業家の内にも酒屋の餅屋もあり、魚屋の青物屋となりしものもある、是れ即ち人々其性質才幹に適應し、其の技術の長所を利用して、大に其手腕を振はなければならぬ時代と

なつたのである。眼を廣ろく世界列國の大勢が如何に發展しつゝあるかを見るに、富國強兵は其の國の安寧幸福を計らんが爲めに、各國は互に深き注意を拂ひ、苦心劃策しつゝあり。而して其の強兵の論も基づく所は上下擧つて富國の道を講ずるを以て第一となす。

□ 商人の努力すべき秋は來れり

此時にあたり、商業家は優に國家の盛衰消長に關する運命の一半を掌握して居るものと知らねばならぬ。商法家たるもの、應に大に興るべき秋ではないか、然れども甚だ遺憾に堪へざるものあり、そは商業思想の未だ國家の上下に普及せざること、商業道德の甚だ幼稚なることであると思ふ。

前述したるごとく、自利的な舊思想は今日でも未だ全く除去せられ
ては居らない。社會國家の利不利は招きて顧みず、顧客の爲をも計
らず、其の場のがれの巧言を吐いて人を瞞着し、一時の利を貪らん
とするもの多きは實に慨嘆の至りである。我が國では、因襲の久し
き爲め、商法家は不人情不徳義のものであると始めから考へ、其の
行動に付いても、それほどまでに非難するものもないけれども、我
が國情に通せない歐米人が一度其輪索にかかりし事を知るならば、
我が國家に對し、將又我が國民に對し、殊に我が商人に對して幾干
の不愉快を感ずるであらうか。曾て來遊した一外人が我が商人を見
て利益の前には徳義のない、人情のない破廉耻漢であると攻撃し、
公然自國の新聞紙上に投寄したと云ふ事は時々耳にするとところであ

る。此れは自己一人の小利に迷ひて、其爲に社會國家に及ぼす損害
や、自分の店に永遠に招くべき不信用不利益と云ふ事を省みないも
のである、斯の如き事にて如何して世界の市場に圓滑なる活動をし
信用を得ることが出来やうか。兎に角商業思想の啓發と共に商業道
徳の改善は、刻下の急務である。

第二 商機と禪機

□ 商の字義 || 機の字義

さて此の商機と云ふことは、讀んで字の通りであるが、商と云ふ字
は、或る人が、おもしろい説明をして居る、商の字は、篆形、商、

に作る、辛問、との合文であつて、辛、は後世の、罪、の意味で、商業の商と云ふのは後世の轉義である、本義は商量、商議の商で物事をどうしよう斯うしようと相談する意味で此字の形を見に(辛)即ち罪人が窓穴、(問)、下にクド、竊に脱走策か、何かを相談して居るてふ、會意字である、元來言(辛口)の字を初め、(辛)、即ち罪人に従つた字が漢字中に少くないのは大いに、御互に注意すべき點である、一概に罪人と言へば大悪人のやうであるが、今日の罪人と、古代の罪人と、少々性質の相違があるやうである、古代の罪人は、必ずしも惡逆で人倫を顧りみないやうな、不逞無頼の徒ではないので、被征服者、即ち罪人、罪、即ち奴隸であつたらしく、而して古代に於て、被征服者の文化が多く、征服者以上であつたのは、世界に於ける古代史

の歴々證明する所である、そうして文化と腕力とは往々、逆比例をなすものにして、文字の如きも或は、此の被征服者の手によつて製せられたか、若しくは、傳へられたかも知れない。辛、の字上(二字形)、干、従ふ、上位、の人に向つて干犯する會意字であると云ふ事で、不法の、壓制束縛に抵抗するのは、人間自由の大精神であるから、必ずしも惡意ある字ではない、妻妾の、(妾)の字、(辛)罪、女、の合文であつて、被征服者の女子は征服者の獸慾の犠牲たらざるを得なかつた、古代の風習を明らかに語つて居る。

又衝突、の衝の字は、重、行、の合文で、物賣り女の行くものと來るものとが、途上に相逢ふ、頭上の荷が輕ければ、互に相避けるにも容易であるが、重くて自由が利かぬから、マゴくする中にドサ

ツリ、と互に衝突する、會意で製した字であるそうだ、で商人は古代は階級が極めて低くかつたようだ。なんでも昔は今日の如き勢はなかつたかもしれない。然し普通商と云ふ字は、アキナイ(賣買)、あき(秋)、はかる(度)、つよし(強)、という意味で、商とは、營利の目的で以て貨物の轉換を媒介する行爲となつて居ります。

機きの字は、機關きくわん、若しくは機略きりやく、樞機すうき、そういふ工合くあひに熟字致じますが、之これに關くわん、と云ふ字をクツ附ければ、カラクリ、と云ふことになる、で此の機關きくわんの、機きと云ふ字はどう云ふ譯かと云ふと、機關車きくわんしやの機關きくわん、と云ふのは之これは、華嚴經けごんきやうと云ふお經きやうの記釋きしやくの中に斯かう云ふ面白おもしろいことがある、「物ヲ容レテ動カスモノ、之ヲ名ケテ機トナス中ニ於テ轉ズル者説イテ以テ關ト爲ス」、即ち物を動かす處ところの中心ちゆうしんが

機きであつて、中に於て轉ころがつて工合くあひ能く行くものが關くわんである、之こを機關きくわんと云ふ、是これは華嚴けごんの遠法師えんはふしと云ふ人の註釋ちゆうしやくである。

天台てんたい教祖きやうそ、智顛ちでん大師だいし、が妙法蓮華經めうほふれんげきやうりつ立義りつぎ卷六くわんに、その語義ごぎとして微關ゐくわん、宜ぎの三種しゆしゆを説いて居をらるゝが、最初さいしゆの微ゐ、の義ぎは何等なんらかの發動はつどう的てき可能かのう力りき、を有いうするものとの意味いみである、次つぎの關くわん、の義ぎは何等なんらの點てんに於てか對者たいしやと關係くわんけいし得るものゝ義ぎです後の宜ぎ、の義ぎは對者たいしやが何等なんらの點てんに於て何等なんらかの手段しゆだんを施ほどこし得る便宜べんぎあるものゝ意いである、初はじめの二義にぎは機き其そのものゝ上うへから説き、後の一義いちぎは對者たいしやに立ちて、機きを解かいしたるものと見るのであるが、最も普通ふつうに認めらるゝ機きの語義ごぎは、初はじめの二義にぎである。なせかと言ふに佛ぶつ陀だ菩薩ぼさつ等の諸大師しよだいしの教化けうくわの啓導けいどう、を烹うくべき可能かのう性を存ぞんするもの、又は、諸大師しよだいしと何等なんらの點てん

に於てか關係し得るもの、吾等人類の佛教に入れるもの、若しくは當に入るべきものを汎稱して、機と爲して居るからであります、我が禪宗に於ては教化啓導を受くべき人を指すのでなくして、此の教化啓導する任に當るべき、師家の弟子に對する機用を呼んで、之を機と爲すので、第三義に恰當するものである、要するに機の語は佛敎に於ては、二様に用いて居るようである、或は又、機に就いて大機小機、頓機漸機、と稱し、或は顯機密機、傍機回心機末廻心機等に雜多の類別があります、けれども悉く此れ宇宙の大機の事である。又説文には「發する事を主る之を機と謂ふ、又關は、要會の處なり」要と云ふのは、カナメの所であると云ふのだ。

そこで商法家が手を動かすのは、皆な金錢の爲であると云ふ事は極つて居るけれども、それは獨り商法家ばかりではない、教育家でも宗教家でも、政治家でも皆んな執方かと云へば、之を概觀すれば金錢の爲めで、直接に掴むか、廻り遠く掴むかと云ふ違ひだけで、これもこれも金錢の爲めに手を動かし、足を働かすと云ふことは同一である、「ナリーニ、僕は金錢などは……」と云つて居るが、自己の心内に立入つてみると、皆な金が欲しくてムヅ／＼して居るものばかりだ、知事になるの、大臣になるの、何の彼んのと云つても結局金錢の爲めに使はれて居るのである。維新以來随分偉さうな大臣方も澤山あつたけれども、無報酬で大臣になつた人が一人でもあつたか代議士や何かでもさうだ、エライどうも實業の爲めだとか、社會の爲めだとか、上手に聲色を使つて居るけれども、報酬なしで代議士

になつて居る人と云ふものは一人もない、軍人亦然り、金筋の嚴めしい風をして居るけれども、矢張り狙ふ所は金だ、給料なしの師團長や、聯隊長が一人でもあるか、只直接に金を取扱ふか、或は間接に取扱つて居るかと云ふだけのことで、天下悉く皆な金の爲に動かされぬ者はない、世界の戦争の如きも何が原因かと云へば、原因は利益にある、イヤお前の方が餘計利益を取つて、俺の方が損害をしたと、云ふやうなことから詰り此の戦争と云ふものも起つて居る、して見ると、世界のことは、即ち人間のやつて居ることは、皆金ならざるはなしである、然し君子財を愛す之を取に道ありしや。

□何が爲に金が欲しいか

扱てその金は何んの爲に欲しいか、金は何の爲に必用かと云つたならば、詰り金を餘計に取つて、好い着物を着て、大きな家に住まつて、うまいものを食つて、男は女を、女は男をと云ふやうな工合で所謂箇性の快樂、箇性の保存、箇體の快樂をヨリ多く貪らんが爲めに、金錢を餘計に欲しいと斯う云ふことになる、もう一つザツと云へば、何の爲めに金が爾う欲しいかと云ふと、良い着物を着るのも人に笑はれないやう、立派な家に住居をするのも人に笑はれないやう、人に笑はれるのが厭さに、餘計金が欲しいと云つて集めて居る譯である。で只金が欲しいと云ふならば、恥をかき、義理をかき、人情をかきさへすれば、金は自然と溜るけれども、人に笑はれるが厭さに金を蓄めやうとして、蓄めて却つて恥をかいて金を使ふと云

ふことが幾らもある、マア此の義理と人情と恥との三つをかきさへすれば、大がいの人は金が溜る、人と約束をした、どうも儲かりさうだから約束を破約してしまふ、損をすれば止めてしまふ、爾う云ふ都合の好いことばかりやつて居れば、金は溜るに極つて居る、もう一つ平易に云へば、大きな詐欺取罪でもやつて、一年や二年間、獄へ入つても、勘定して見てその方が結局儲かればどんなことでもやると云ふやうなことであつたならば、是れ亦金は儲かる、何の爲に金が欲しい、笑はれるのが厭さに金が欲しいと云つて金の爲に笑はれる、それでは幾ら金を取つても一向値打がないではないか、斯う云ふ點から考へて見ると、商業を以て世に立つと云ふ者は、餘程高尚な精神を以てやつて貫はねば駄目だ、軍人が劍を握つて千軍萬馬の

間を往來する如く、吾々宗教家が仙人染みた顔附をしてお話をして居るなどと違つて、直接金貨を扱ひ、直接紙幣の中に居つて、金貨を生命とし、紙幣を生命とする人だから、其仕事さへ済んで了つたならば、手に珠數を掛けて見るか、仕事さへ済んで了つたならば、拍手でもして見るかせねばいけない。朝から晩まで現金ばかり取扱つて居る人は、どうしても品性が下劣になつて来る、金より大切な物がないと云ふことになつて来ては、商業家としての高尚なる、紳士らしい、奥床しい人格と云ふものは養はれぬと云ふことを考へて見たいものだと思ふ。それは坊主でもさうである。「来る人に捨てよ捨てよと勧めつゝあとでは拾ふ寺の慾坊主」、どんな者でも慾のない者はない、釋迦如來でも一切衆生を善良なる人間にしたいと云ふ矢張

り慾はあつた、どんな人にも慾はあるが、その慾の味ひにも又色々ある、どんな人でも金の慾しくない人はないが、殊に商業家は金の爲に手足を機械の如く動かして居るのであるから一層の注意を要する。

□如何にせば金儲があるか

然らば如何にしたならば金儲が出来るかと言ふに、已に皆の承知の通り「商人はゆがまねば立たぬ直ぐなれば直に倒れる」と云ふが、此れは大變な間違である、或る時某家に、年久しい古屏風があつた、嘗て主人の夢に顯はれて曰く、「年頃私を曲める者とのみ思ひ給ふこそ口惜しくござります、曲げて立るは私の心ではありませぬ、伸る

と縮むる事の過ぎた時は、片時も立つ事は出来ません、伸ると縮むるとの中道を得る時には、久しく立つて居ても危うござりません、其の上立つ所の地平かに、正しくして立てないと、則ち覆へり倒れます故、之れが第一の身を立て世に處して行く道の秘訣であります、主人たる者も先づ其の一心を平かに、正しくして其上に、商買の伸縮を考へて餘りに開かず、餘りに縮めずして、能き程に身を立る時は、何時立つても危き事はありませぬ、主人は此の理を知らずして我を曲める者とのみ心得たまふは、口惜しく侍ると、之は誠に面白い話である成程曲んだ事をして一時は金儲が出来るかはいしれないがそれは決して永續の出来るものではない、因果の理法を信じてそれに従つて商法すれば、必ず失敗はない、と云ふ事は誰も能く心

得ては居るが、これを實行するとなるとなかく、困難である、佛を信ずるものは自分の眼には見えねど、神や佛が明かに御照覽ましますと云ふ信仰があるから、決して辟んだ事はできないのである、又佛の御照覽と云ふものを認めて居るから佛の御冥助と云ふことが深く信せられて、商賣するにも心丈夫に出来るのである、そこで皆も今後商賣をする上にも其の他、何をなすにも、佛の説かれたる原因結果の大道理を深く信じて、是を實行し、すべての事をなせば必ず失敗はなく成効すると云ふ事を注意する次第である。

第三 不二の商機と禪機

□ 禪宗眞理の代名詞

私は宗教家であるから、商人の方の金儲けの術は知らない、けれども此の禪宗の機會と、商法家の金を儲ける機會と云ふものを比較して見ると、何れも皆な同じことである、米相場のことをば投機業に手を出したと云ふ、併し是れは相場のことばかりでない、禪宗でも矢張り投機と云ふことがある、それは此の機と云ふのは、所謂商機に投じたのだ、商法家の方で云ふと商機に投じたことをば投機と云ふ、即ち金の儲かる機に投じたのである、之を禪宗の理法、所謂禪

機と云ふものから云つたならば、斯う云ふことになる、先ず茲に假りに斯う云ふ眞理と云ふものがあるとする、即ち絶対眞理の大機なるものが、此の大機は普遍在で何處にもある、眞理と云ふも同一で何處にもある、諸君の既に承知せるが如く、佛教が宗派に依つて南無妙法蓮華經とか、南無阿彌陀佛とか云ふ念佛や題目がある、此の南無阿彌陀佛といふことを先づ考へて見るに、本願寺などへ行つて見ると、阿彌陀佛の後ろには御光と云つて光明が差してある、此れが取りも直さず十方世界に光明を輝かして居ると云ふ形容で、何も此の南無阿彌陀佛と云ふのは、蓮如上人や親鸞上人の考へたものでなくして、吾々の本心も南無阿彌陀佛であれば、此處に敷いてある絨氈も南無阿彌陀佛であれば、此の椅子も、腰掛も、柱も、天井も

乃至一切萬物悉く南無阿彌陀佛の化現ならざるはない、即ち南無阿彌陀佛と云ふは、絶対眞理の代名詞である、例令損をしても、須らく心は廣大無邊でなければならぬと云ふところの眞理が分り、南無妙法蓮華經でもさうだ、南無妙法蓮華經と云ふものも亦絶対眞理の代名詞で、宇宙大機の代名詞である、天に一杯、地に一杯に充滿彌綸して居るところの絶対眞理を言葉を変へて、南無妙法蓮華經と云ふのだから、即ち之も絶対眞理の代名詞に他ならぬ。光明偏照十方世界と云ふのが、南無阿彌陀佛の徳を讃嘆した言葉であり、又、一天四海皆歸妙法と云ふのが妙法蓮華經の眞理の徳を讃嘆した言葉である、即ち絶対眞理の意味である、惜しい欲しい、可愛い、憎いと云ふ如き心ではない、絶対眞理の代名詞として、即ち大機の大機

詞として云はれて居るところの言葉であつて、徧く四界に光明を輝かして居る眞理を指して南無妙法蓮華經と云ひ、南無阿彌陀佛と云ふのである、あの人は禪機を得た人であるあの人は力を得た人である云ふのは、畢竟機に投じたこととして南無阿彌陀佛の大機に投じたことと云ふ意味である、我が宗門に於て、この悟を開いた、或は參禪して其の力を得たと云ふやうな人をば、投機したと云ふのである。言葉をかへて云へば眞宗などの言葉で申て見るとおまかせしたと云ふ意味と同様だが其機の妙は是れ以上説明は出来ない。全く此の絶對眞理などと云ふものは、一寸見ても眼に見えず、形に現はれないので諸君はまだ見たことがないだろう。随分丁稚さんなどが風呂敷包を擔いで、電車の中で出して讀む本を見ると、イヤ佐倉

宗五郎一代記だの、岩見重太郎、石川五衛門などのやうなものであるソナ事では逆も黄金の機などを見る事は出来ない、兎に角此の投機と云ふことは、禪では絶對眞理の大機に投じ、萬兩黄金界の大機に投じたことと云ふのだ、禪宗で悟を開いた人のことをば投機した人と云ふ、此の投機に對しては、特に偈頌と云ふものがある。

□ 禪僧の投機——蒙山異禪師

支那の蒙山異禪師は、飯山正凝禪師に付て修行し、道州無字の考案に苦しむ事二十年であつたが、一日夜半の頃坐禪中に一人の僧、禪堂に入り來つて香を焚かんとし、あやまつて香盆を地上に落したので、カチン、と音を作した、其の物音を聞き忽然として、遂に大機

に投入し、自己を識得し、趙州を捉把した、其の時の頌に

沒興路頭窮、踏翻波是水、超羣老趙州

面目只如此

沒興路頭窮、と云ふは、日用應縁の處に暫時も措かず、狗子無佛性の話を學し來り學し去り、徹底無字になりきつて、執れば手に充ち、歩めば足に滿ち、食へば口に溢れ見れば眼に一杯、聞けば耳に一杯、盡法界即ち天地只この無字になりきつてしまへば、理義分別に沒せず、かくして心頭熱悶するを覺ゆる時が即ち沒興路頭窮の時です、永嘉大師の、所謂、行亦禪坐亦禪、語默動靜體安然の境涯となる、之れを譬へて申せば、健全な胃をもつて居る人は、胃其の物の存在を忘れ、健全な肺をもつて居る人は肺その物の存在を忘れつ

ゝあるが如きものである。然るに不健全な胃や肺をもつて居る人は胃や肺の傷みによつて、身體の中、何處に胃があり肺があるかを自覺して忘れることができぬ、けれども、全身健全なる人に於ては、吾身の存在さへも忘れることができる、これと同じく禪定の工夫熟する時は坐にあつて、座を忘れ、行にあつて行を忘れるのである。此の時に當つては、八萬四千の魔軍が眼耳鼻舌身意の六根門頭に在つて、吾人の隙を窺はんとするも其の便を得ない、魔と云ふは吾人の妄想幻覺に外ならずして、吾人の心に忘念のない已上は惡魔てふ幻覺の現はるゝ處は無い、此の時を即ち沒興路頭窮の時と云ふので正に宇宙の大機に投入せんとするの時である、此の時にはからずもカチン、と香盆の地上に落ちた音と共に、忽然と大悟し大機に投じ

て見れば、滔翻波是水、で今まで煩惱忘念であつた心の波は水の實性であつたわい、無明實性即佛性である、超羣老趙州、で一大偉人大徳の老僧の趙州和尚の面目只如此で、本来の面目は只々此れであつたわい、と遂に大悟した即ち宇宙の大機に投じたのである。

□ 毒峰善禪師

又毒峰善禪師は、鐘聲を聞いて忽ち宇宙の大機に投入せられました其の時の偈に曰く、

沈沈寂寂絶施爲、觸著無端吼似雷、
動地一聲消息盡、鬪體粉碎夢初回、

沈沈寂寂絶施爲、と云ふは坐も又禪、臥するも禪、言語するも亦禪

で、考案三昧になり忘想分別も打破る工夫三昧になりきつた時の境涯である、此の時に、ゴーン、と一聲の鐘を聞いて忽ち大機に投じて見れば、觸著無端似吼雷で其の時の鐘は實に天地にひびき渡つて、百雷の一時に落ちた様な聲であつた、此の一聲は盡十方世界にひびき渡つて居る、動地、一聲消息盡、で此の天地も動揺した程の鐘の一聲は無字も如來も、宇宙の大真理も云ひ盡して居る、鬪體粉碎夢初回、即ち此の超音聲で、けがれたるガリ／＼の五尺の鬪體を粉微塵に打ち砕き、初めて眞に宇宙の大真理を悟る事が出来た、と云ふ意味であるが、なんとなく意味がはつきりしないけれども、此れ以上どうもくだいて話すことが出来ない、然し兎に角禪宗で云ふ投機と云ふのは、是等の消息を云ふのである。

此れを前來の語を借りて云へば絶對眞理の中に投じたと云ふ、商法の方面から云ふても同じ事で、金儲の機に投じた時の事です。

□ 商人の投機

此處に紀州加田浦で、名高い紀の國屋文左衛門、と云へば諸君も既に御存じの有名なる一代富豪の商人であるが、文左衛門がまだ、文吉と稱する時代で、元祿五年の事であつた、其の事は冬の霜月の初旬頃から、非常な暴風雨の爲に海上が大暴で、船舶の往來も絶へ海運の便利を失つてしまつたので、諸國からの入船を待ちこがれて居る江戸の商人共は、俄かに大恐慌を來たして、諸物價はドシ／＼騰貴する、中でも蜜柑はいつも紀州から供給される事になつて居た

のだが、紀州からは此の大暴風雨の爲に一隻の舟も通はない、平生は一つ二三文で買へた蜜柑も二百三百と云ふ高値となつた、此の時窺かに機に投せん事を待つて居た文吉は、時こそ來れと、數多の蜜柑を買ひ集めた、連日の暴風で輸出の道を失つたので、蜜柑は二束三文の廉値でまるで土塊を、貰ふやうなものであつた、此れを二十兩の資本で豫て準備してあつた船に満載して、是れを江戸に轉送して賣らうと云ふのであるが、紀州浦から遠州灘の風波を乗切り、江戸に漕き付けることは平生でも容易でなかつたのに、況して其の頃は不完全な帆前船で、暴れに暴れて居る海上を遙々行くと云ふ事は到底人間業の及ぶところでない、然し文吉は胸に確固不拔な成算があつたので遂に莫大な懸賞を以て、決死の船夫を募つた、其の頃に

紀州から江戸まで往復する船夫の給料は、大概二三兩であつたが、文吉は五十兩を前金で渡すと村中へ觸れ込んだので、人々は如何に文吉でもそれは虚言であるといつて、最初は取合ふものがなかつたが、一人の無頼漢が窮迫の餘りに文吉に遇ふて、「モシ若旦那、今度貴郎が江戸行の船夫を五十兩でお頼みになると聞きましたので参りました、其れは眞實で御座りますか」と問ふた

文吉は、鷹揚に

「お、眞實ぢや、汝往つてくれるか」

「サテ此の暴風雨に乗り出せば、十に八九は生命を奪られるものとは思ひますが、脊に腹は代へられませんが、譬へにもありますとほり、小奴も今は放蕩をした報で嬖や、子供に碌々喰ふ物も喫せられない

始末で、此のままブラ／＼して居ては、明日の日にも親子三人が臑を吊して、地獄へ宿がへしなればなりません、どのみち助からぬ小奴一人の命を五十兩で旦那に賣つたと思つて、嬖と子供だけでも助けて遣りたう御座ります、

「ウムさうかそれでは汝往つてくれるな、諾し、約束の五十兩受取れ」と投げ出したので其男生れて始めて見た、黄金に喫驚して、

「ジャ旦那眞實ですか、

「此の文吉が何で虚言を云ふものですか、早う支度をして来い、この事で船夫は夢かと打驚いて五十兩の金を携へ歸へつて、仲間の誰彼に話すとよもやと、思つて二の足踏んだ船夫等は、我れも／＼と募りに應じたので、遂に七人に及んだ。文吉は船夫を引連れて船に乗

り込み、山の如き怒濤を事ともせず、遂に加田浦を出帆したが、何れも命をなきものとして募りに應じた荒男、必死の覚悟で漕き出したので船は怒濤に揉れながらも箭を射るよりも駛やく、百五十里の海上を三晝夜の中に品川沖まで漕ぎ付けた、此の時風は漸く止んで波も静かになり朝霧の間から前に現はれた、江戸の町街、九死を決して船夫等も漸く一生を得て喜に満ちくた。

「ヤア若旦那助かりまして不思議で御座りますな、と異口同音に喜び勇むも道理であつた、打續きての暴風雨で十日餘り帆影の絶へた、海上に思ひもよらぬ、入船があるので江戸の船問屋でも驚いた、見れば紀州産の蜜柑を山の様に積み載せた船である、二百年後の今日まで『沖の暗いのに白帆が見へるあれは紀の國蜜柑船』と語り難さ

る歌の一節は、此の時の光景を云つたものである、文吉は此の一擧で莫大の利益を占めた、それより加田浦の船夫漁師は、文吉に服事すること國主にも勝るやうになり、其の用を辨すれば文吉は之れを利用して、海運漕の業をますます盛んに營んで、遂に巨萬の富を重ねるに至つたのだ、文吉は常に人に向つて云ふやう「財を聚めて散する事を知らざるは、守銭奴なり、財を散じて聚むるを知らざるは貧乏神なり、我は天下の財を聚めて又之を散せん」と。かるが故に日に營利を事とする身にも拘らず、奴婢などを遇すること非常に厚く窮を訴へ貧に泣く様なものゝあるを聞けば、一面識のない者にも金を與へて之れを慰撫したとの事である、之れ實に機を見て猛進した人、即ち商機に投じた人である、黄金の機に投じた人である。誰

人といへども此の機に投じさへすれば、金は屹度儲かるものである。

□ 商人の金、禪僧の道

商法をなさんとする者は何を目的として居るか、何を生命として居るか、と云つたら、云ふ迄もなく「金」である金が商法家の生命であり、商法家の體得せんとする眞理の代名詞である、諸君の同業組合員中にも其他何れの方面の商業家中にも百萬圓の所有者もあろうし、二百萬圓の所有者もあろうし、又中には無一物にて、三度の食事も自分には調ひかねて人の家に使はれて居る人もあろう。けれども、其の金なるものは、何處の金にしても、之れは甲家の金、之れは乙家の紙幣だと限られてゐる譯のものではない、金と云ふものは何處に

もあつたものだ、佛蘭西にもあれば、獨逸にも英吉利にもある、決して誰某が絶対に専有して、離すことが出来ないといふものではない、それだから儲ける人もあれば損をする人もある、金と云ふものは如來の光明と同じことで、天にも一杯、地にも一杯、東京にも大阪にも佛蘭西にも獨逸にも個處にもある。けれども、この金の機に投ずることが出来なければ、金儲けは出来ない。これが大切なことで金を儲けるの秘訣である。要するに禪の方で云ふ投機と、商法家の所謂金の機に投ずると云ふ投機とは同じ事であると思ふ。又何事をするのでも皆悉く這個の活作略に依らざるものはない。

機を得て成功す、世の多くの人は少時より異才があつて其の得意とする所を成し遂げんと、企つるものが多いようであるが、然し必ず

しも異才がなくても或る機會に於て、偶然思ひ立ちし事が大いに興味をひきをこし、其の爲に事業の上に大成功を來たすこともある、なにも異才がないからとて絶望するものではない、時に機會を捉へて専心之れに従へば又必ず投機する所があるものである、英國の學士、プリストレーは一日偶然、近所の酒造家に到り、泡立てる酒の上（ひかり）に光のある物の浮（うか）び流れ、又忽ち消滅するを認めて、それから之を研究せんと思ひ立ち、終に有名な化學者となつたのである、世に有名なる小野道風が、書道に達し終に天下の三蹟とまで謳はれるに至つた機會も、實は柳の枝（えだ）に蛙の飛移（とびうつ）らんとして、苦心して居るのを見て奮發したといふではないか、又南都元興寺の明詮法師は十歳許りの時に出家したのであるが、至つて魯鈍で物に怠りやすい癖が

49 機 禪 機 商 の 二 不

あつた、然るに一日他に行かんとして雨に逢ひ、大佛殿に晴れ間を待つて居た折しも滴々軒の雨水の落ちる處の石が悉く窪んで居るのを見て、忽ち猛省する所あり、豁然として曰く、水の如き極めて柔きものも終にはよく極めて剛き石を穿つのである、我れ不敏なりとも勉めて止まずんば何とて博聞の域に達せざらんやと、之れより大急ぎに寺に歸つて刻苦勉勵した、その結果が遂に法相宗の碩徳となり、僧都と云ふ位置にまで任せられて名を四海に馳せたのである、これ等も又、志を雨滴に依つて機會に投じたから其の魯鈍の凡才をして大成せしめたのである。今日の青年商人の人々は、之に鑑みて大に奮起して貫はなければならぬ。

□ 金儲の機は何處にもある

思ふに此の金儲けの機會と云ふものは何處にでもあるもので、毎日諸君の前で以てお金は欲しくないか、お金を上げませうかと云つて其の各々の境遇に應じて眼の前にブラついて居るのだ。けれども、どうしたもののか、今日の青年諸君は只腕を組んだまゝ、炬燵に當つたり左り團扇つかふてなまけて居つて、努力憤進して其機に投ずると云ふ事をしないのは遺憾である。自己の最善に向て勤勞せず持つて来て下されば、頂戴致しますが、と云つて呆然として百年河清を待つが如き態度は實にどうも可笑しいものだ。

□ スヒンクスの話

アメリカの或る片田舎に、スヒンクス、と云つて至つて怠け者が住んで居た、其の村の人は又非常に慈悲深い人達ばかりで、此の怠け者の、スヒンクスに毎日食物を與へて、何に不自由もなく暮しの出来る様にしてやつてゐたが、或年大凶年で明日の食ひ物もない様な事になつたので、村の人々が大集會を開いて、此の怠け者のスヒンクスを養ふことの出来ないからと云ふので、本人も承知の上でスヒンクスを遂に活きうすめにする事に決議した、そこで多勢の村人はスヒンクスを棺の内にに入れて、今や穴の中へ活きうすめにしようとする所へ、隣村の老人が通りかゝつた、ところが多勢わいゝ騒ぎ

たてゝ居るので、老人は、何をなさるかと問ふと、隣村の人々答へて云ふには

「實は此の凶年で皆の者が食ふに困つて居る様な場合ですから、此の怠け者のスヒンクスを養ふ事はとても出来ませんから、村中相談をし本人にも承知をさせて、今スヒンクスを活埋めにする所であると云つた、此れを聞いた老人は、「それは如何にも可愛そうな事をなさる、そう云ふ次第ならば、私も澤山はないけれど、米を四五升スヒンクスさんにあげますから、そんな活埋めなどと云ふ、可愛いそ
うな事はせずに止めて貰ひたい」と云ふや、棺の内よりスヒンクス大きな聲を出して、御老人あなたの下さる米は、玄米か白米ですか
い、老人驚いて、「それは御前さん知れた事さ、玄米だからお前がつ

いて食ふのだよ、そこでスヒンクスは、「それならいつそ生埋めにして貰ふ方がやつぱり世話がなくてよろしい」と云つたそうだが、何んと世の中には方圖のない怠け者もあればあるものだ。今日の青年商人諸氏の中にも、手を拱ねて炬燵に當つて其のまゝ「どう致しまして金は要りません」と云つて居る人は、スヒンクスと同じ様な人と云はねばならぬ。

世の中に花も紅葉も金銀も

興へてあるぞ精出してとれ

働かさへすれば金は出来るものである、それをどうも近頃の若い人は働くのが厭になつて、ナア ندا詰らない、タツタ襦袢一枚や帯の一筋位貰つたつて何にもならぬ、斯んな所には何時まで居つても立

身出世の出来る見込はない、などと勝手なことを吐いて彼方此方と迂路つき廻つて、始終貧乏して居る、斯の如きことでは到底機に投ずることは出来ない。

□ 商人の魂

商人ばかりでなく軍人とても踏み止まり、即ち「負けない、と云ふ魂がなければ決して戦争の機に投じて勝利を得る事は出来るものではない、日獨戦争でも日露戦争でも、日本が大勝利を得たと云ふのは、日本軍人には常に「踏止まり」と云ふものがあつて、獨逸人にも露西亞人にも勝ち得た所以で有る、世界の名将、ナポレオンも曰へり「戦争の勝敗は最後の五分間にあり」、此の最後の「踏止まり」と云ふも

の程大切なものはあるまいと思ふ、負けて溜るものか、負けては大耻辱である、日本軍人の面汚しである、と云ふ所の日本魂、負けじ魂と云ふものがあつたが爲めに、如何なる悪戦苦闘にも一寸も退かず、敵に後ろは見せぬ、と云ふ踏止まりの大勇氣が出て見事な大勝利を得たのである、所が軍人が斯く踏止まりがあるやうに、日本商人には踏止りがあるかどうか、之れ少し疑はざるを得ない。少々景氣が好いからと云つて、雀躍りし、不景氣だからと云つて青菜に鹽の様な顔付する様では、とても踏止りどころか、踏み潰されてしまふばかりである。「どうも支那人の忍耐にはかなはぬ」、「西洋人の大仕掛にはとても寄り付く事が出来ない」、「どうも舶來品に限りますな、和製は實はだめです」、などと自卑自屈に陥つてしまい、「負けて溜る

ものか、負けては日本商人の大耻辱である、「日本商人の面汚しである」と云ふ者がとんと少ない、此れだから自然に貿易の統計を見ても輸入超過ばかりで日本商人は負け通しである。此れは日本商人たる諸君に是非共、大奮發して貫はねばならぬ所である。内地の商業だけですらも日本商人には少しも軍人のやうな「負けじ魂」、「踏止まり」がない言葉を換へると、商人魂と云ふものがない様に思はれる、只日本商人には、ズルイ考へコスイ考へ、マカシ考へ、一寸其の場を膳ふ考へなどは、外國人よりも優れて發達して居る此の點だけは中々西洋人も舌を捲くほど、エライが、こんな才略は封建時代には、必要であつたかも知れないが、四民平等内外交通の今日には如何にしても不向きな、餘り必要の少ないものと思ふ。然らば文明進

歩の日本商人としての精神覺悟はと云へば、別に多言を費すを要せぬ、只々マケナイ、の四字である、此れを六ヶ敷云へば商人には、忍耐、剛毅、進取、正直といふ、如き諸徳が必要であるが、此れもマケナイ、の一點さへ發揮して貫へば以上の諸徳は綺麗に、成功する事疑ひないことと思ふ。永久に昔日の態度でボンヤリとして居つては、利巧な者に必ず先を越されて仕舞のみならず、外國人などに必ず得意先を奪はれて仕舞ふやうなことになる、これはどうしてもよく時勢を観察し世人の嗜好といふものを考へて、其の時想應に裝飾も改めねばならず、店も廣めねばならない、趣向も代へねばならぬ、といふやうなもので常に毫も油斷せず間隙を生せしめぬやう、即ち機に投ずるの時を忘れてはならぬ。機に投ずる人の遺方と云ふ

ものは、又何處か他と違ふ所があるものだ、機に投ずるも畢竟は一生懸命働くにある、どうもあの男は吾々同業者の組合員の中でも、感心な男だ、二年三年も眞面目に働いて居る、實に感心だ、と云ふやうな譯で、後から来たものも先輩を追抜いて利益を得る事が出来る、これが詰り金を儲くべき機会と云ふものを捉へることの上手な遣方である、其の機会と云ふものに、カッチリ合ひさへすれば直ちに金の眞理の中に飛込むことが出来る、茲が即ち禪宗の眞理と、商法家の金と云ふものを取入れるところの眞理の機会とは同じ事である、商業の大利益を得る機会と、禪宗の修行して眞理の大利益を得るところの機会とは、一見遠いやうだけれども、相一致して居ると云ふことを私は発見して非常に面白く思つた。

□ 禪機の妙句

吾宗門で愛用吟賞する言葉に

泉聲中夜後、山色夕陽時、

と云ふ妙句がある能く達磨の讚に書いてある一と口に云へば泉の聲は夜半の後だ、山の景色は夕暮の時と云ふことでありますが、全く此の通りだ「山色夕陽時」夕陽の時の山の景色と云ふものは、得も云はれぬもので、いつも同じ山の本體を隠さず能く現して居るが、夕陽の時間が最もよい。又泉聲中夜後、寛の水がチヨロ／＼と流れて居る、よく爾う云ふ所がある、山住居をされて居る方は御承知であらうが、寛の水が臺所に通してあるが、何時も其の水の落ちる音は

聞いて居るけれども知らずに居る、仕事を済まして寢床に入つた時分に漸くそれが喧しいほど目に立つて聞へることがある、電車の音でもそうだ、轟々と日夜唸を生じて居るけれども晝間の内はどうしても其の聲が目立ちません、金の爲に心が囚はれて居つたり、算盤に心を奪はれて居つたり、店のことばかり考へて居る時分には、自動車の音が喧しく聞えても、電車の響が喧しく聞えても、一向耳に入らないけれど、もう床に入つてちつと心の静まつた時と云ふものは、非常にその音や、響と云ふものが耳に觸る、即ち晝夜間断なき泉聲も中夜の後に始めて耳に入る、此の泉聲と云ふことは絶対真理と同じことだ、山色は矢張り眞理の本体を指して云ふのである。達磨さんの讚として見ると達磨さんはどんな所にも居られると云ふ

ことだ、達磨の聲は何時でも聞えて居るけれども、此方の心が他に捉はれて居り、此方の眼が他に捉はれて居るものだから、之を見ることが出来ないのだ人静かに、夜静まつて内に反省した時に、始めて泉の聲を聞くことが出来、達磨大師の音聲を聞くことが出来る。達磨の姿は何時でも見えるけれども、吾々の眼が外の物に捉はれて居る爲に、之れを見れども見へず眼に一杯見ながら之を意識しない即ち達磨なることを知らないのだけけれども、山色夕陽の時、今まで山が彼處にあると云ふことを知らなかつたので、日將に西に入らんとする時に始めて山の本体が意識されると同じく、始めて眞個の達磨を相見することが出来る、始終眞理の聲は聞えて居るけれども、機會がなければその聲を聞くことが出来ない、「泉聲中夜後」中夜の

後でなければ泉の聲を聞くことが出来ないやうに、何等かの機會がなければ、眞理を發見することは出来ない、達磨の本體も見ることは出来ない、達磨の音聲を聞くことも出来ない。

第四 時節因縁を觀ずべし

佛教に斯う云ふ言葉があります、「佛教の大事因縁を諦めんと欲すれば、應に時節因縁を觀ずべし」、是れは何も佛教眞理のことばかりではない、算盤を持つものも其の時節因縁を觀じないからして、何時もキヨロツクのだ、此の時節因縁を諦めて居らなければ、又時節因縁を觀察する力がなかつたならば、商法家は決して成功は出来ない

商法家が錢を儲けんとすれば宜しく時節因縁を諦めて、それを觀察するところの力を持たなければならぬ、此の力がなければ錢は儲からない、世の中には只無暗に成功を急ぐ人があるが、之れが最失敗を招くもとである、斯う云ふと、夫れでは甚だまどろしい迂遠な話である、我々商人は今少し早儲けをせなければ承知が出来ないと思はれる人も有らうが、併し早儲けほど商賣に大敵はない、彼の徳川家康の遺訓に、「人の一生は重荷を負て遠きを行くが如し急ぐ可らず不自由を常と思へば不足無し、心に望起らば困窮したる時を思出す可し、堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ勝つことばかり知りて負くることを知らざれば、害其の身にいたる、己を責めて人を責むるな、及ばざるは過ぎたるより勝れり」とあるが、實に至妙の格言で

あると思ふ、然るに世間の人は多くは成功を急ぐの餘り、只妄りに勇氣を出して進みさへすれば、急に成功するかの如く考へて居るものが多い、然し夫れは決して成功せられるものではない、能く人の云ふ事であるが、彼の徳川家康と、織田信長との性格は丸で正反對で、信長は只勇氣一徹で天下何ぞ恐るゝに足らんやと云ふ勢ひであつた様子がある。

□家康と信長の性格

家康はすべて物事に沈思熟考して、徐々とすすみ行く性格であつた。依つて或人はこれを、仁と勇とに分けて性格を示して居ります、家康の肖像を畫いて其讚に、「泣かぬならなくまで待つほとゝぎす」

是れが家康の仁と云はれる性格の現はれたのである、次に信長の肖像を畫いて其の讚に、

「なかぬなら舌を引きぬけほとゝぎす」と是れが信長の勇を現はしたのでありますが、此の一は勇氣にして烈しく、一つは仁にして優しい故に、此の兩將軍の一代の行動上に其の事實が現はれて信長の勇も竟に家康の仁に及ばなかつたことは、歴史の明かに証明する處である。凡そ商法家が商賣に従事するにも、毫も宗教の信念なく、時節因縁因果の道理を撥無して、只己が勝手氣儘に遣り抜けるものと考へて、種々な權謀術數を回らしてやつて居る人は決して、永續するものではない、恰も信長の業半ばならずして斃れたのと同様である、然るに宗教の厚き信念より、佛の慈悲を以て我が心とし、佛

の慈悲で帳面や算盤の上に見はると云ふことになれば、すべて物事に對して、眞面目になり遠く慮り深く考へ、徐々と進み遂に機會を得て成功するに至るのである、恰も彼の家康が徳川三百年の太平を保持のと同様であります。即ち家康は時節因縁を達觀しつゝ大忍耐を持ちて成功を急がず、窺かに天下を統一すべき機會を待つてゐたのである、若し商法家が早やく成功しやうとしたならば、時節を待ち商業の機會を捕へねばならない、若し此の機會を捕へることが出来なかつたならば、如何なる勞働をしても、活動をして、金の欲しくない人はいざ知らず、逆ても金を儲けると云ふことは難いことであらう。

□ 進退に去就

すべて人の一生を通觀するに進退、去就の際に狐疑し、當惑し、煩悶する時間ほど詮らないものはない。然し、如何なる人と雖も、此の不快活な或る期間を経過せねばならんとしたならば、唯だ速かに之を経過せしむることを努力し、唯だ一蹴りに蹴り飛ばして經過せねばならぬ、執着は事を成し遂ぐるに付ては最も緊要なるものではありませんが、而し鑛脈の無い山を如何に穿つても、如何に鑛物を探ろうとしても、到底其の目的を達する事はできない。斯る場合には執着すればする程失敗の度は増すのみである、人間は寧ろ見切りを附けて他に有望な物を求むるに如くはないけれども餘りに急に見切

を附けてもその爲めに折角七合目まで仕上げし事業を空しく他人の收穫にする様な例は少くない、斯く觀じ來ると執着すべきものや見切るべきものやら殆んど其の標準の定まる所を知るに苦しむ、此の時こそ進退の機を見ることの必要な時で之を逸したが最後設令失敗してもそれを見切ることが出來ず、意地穢く執著して失敗の上には失敗を累ねると云ふ事になる。然し又見切りを附るの必要は只單に失敗の場合ばかりでない。どちらかといへば寧ろ最も成功した得意の場合にあるのである、彼の奈翁の如きは其の著名な適例である、若し彼にして足るを知り止まるを知つて居たならば歐洲の近世史は恐くは別様の發展をしたのであらうと思ふ、絶大の英雄が孤島に幽囚せられた様な、不思議な終局は夢にも見る事は出來ざりしやも知

れぬ、新田義貞が尊氏の敗走して西國に下る時に、其の追撃の手緩かつた爲に、空しくも、前の功を無にした様な、事は今尙遺憾な事である、人間と云ふものは動もすると今一息と云ふ所で頓挫してしまふ事がある、附くべからざる時に見切を附くるも、附けねばならぬ時に見切を附けざるのも兩つながら非である、而して兩者の間に彷徨する如き事は、又最も非である、明治卅八年八月締結せられたポーツマス條約に就て、今考へて見まするに、何人もあの條約の一點一畫も是れは完全無缺なりとは云へませんが、大體に付て考ゆるに、吾人は國際的掛引の上に於て實に見切る可き場合に見切りを附けた、即ち退くべき機を逸せなかつたと斷言するに憚りません、若し今日に於て虚心平氣に、當時日露兩國の相對的位置、及び國際政

局の場面について回想したなれば思ひ半に過ぐるものがある。吾人は國民の嗔りを胃かして迄も善く其の見切る可き機會に見切を附け、其の戦功を全ふしたるを嘆稱せざるを得ないのである、吾人は執着すべき場合には石に嘴附ても執着し、見切る可き機會には潔く見切り、我が兩腕を投げ出すことも遲疑しない。如何なる場合に進み、如何なる場合に退き、如何なる場合に就き如何なる場合に去るかにあるので、若し夫れ進むにあらす、退くにあらす、去るにあらず、就くにあらす、即其の機會を逸したならば、愚も亦た愚なりと謂ふ可きである、然らば則ち如何にす可きか此處に於ては何人も進退、去就の機を知るの心得がなければならぬ。即ち、機を知れば成り機を知らざれば敗れる、古から今に至りて敗の跡を尋ぬるに

殆んど一として此の機の一宇に基かないものはない然らば如何にして之を知ることが出来るか、是れはどうしても其の人の職業に於て自得するの外なき活問題である。此の自得の活學問は自修するより外に致し方はあるまい、是れ實に言語文字の能く盡す所に非らずである、而しよく／＼考へて見るに、我宗門の所謂絶大の光明を感得する即ち、此の眞理の機に投ずるにも、時節因縁を諦めなければ其の眞理の中へ入ることは出来ない、是はどうも商法家としては屹度それに違ひない、西洋人の金言にも爾う云ふことがある、同じ意味です、「忍耐して時節到來を待て、又單に何程かの利益を得ん爲に、賣買する勿れ」能く云つてある、「忍耐して時節因縁の到來を待たなければならぬ、今度鐵商の人が大變儲かつた、染料商が儲かつた。

生糸商も、此の時節因縁を三月四月待つた爲に金を儲けた人が澤山ある、之等は總て時節到來を待つたお蔭である、人の禪で角力を取つて居る人は、此の時節因縁を待ち切れぬから喰込んで了ふのである、それだから儲ける事が出来ない譯だ。「利益を得ん爲に賣買すること勿れ」、では商人の本領ではないぢやないかと云ふ者もあるけれども、茲が考へなければならぬ點である。即ち商業の道と云ふものは、只儲けると云ふことばかりが、商法家の根本ではなくして、儲からない所へ融通すると云ふのが商法の道であると云ふ考を以てやりさへすれば、必ず其の間に一々親切と云ふものが籠つて来る、無論時に依ては損をしなければならぬかも知れぬ、社會の爲め、人の爲めに損をしなければならぬことが無論ある、けれども、只忍耐

して時節到来を待たねばならぬ、又單に「何程かの利益を得んが爲めに賣買する勿れ」茲が大に商賣氣質、若くは商法家の面目を示す所だらうと思ふ、又斯う云ふ言葉がある「實價は結局最後の勝を制す」、即ち實際の價のある人が、其の時節因縁を待つて、泉聲中夜の後、山色夕陽の時を見はからつて、手を打つならば、算盤を動かすならば、必ず利益があるに極つて居るだらうと私は思ふ、泉聲中夜後、山色夕陽の時、此の機會を見ると云ふことが大切だ、泉聲は今云ふ通り年中聞えて居る晝夜聞こへて居る、お金は年中どんな不景氣だからと云つても、日本に金がなくなつて了つたと云ふ譯ではないだらうと思ふ、どんなに景氣が好いからと云つて、金貨がムクムク湧出して来る譯はない、斯んなに景氣の好い時はないなどと云

つて、諸君は喜んで居るけれども、一方辛苦困難をして居る人々のあることを忘れてはいけない、田舎へ行つて農村の人達を見ると、青菜に鹽のやうな顔附をして居る、只無茶苦茶に一面に景氣好いからと云つて喜んではいけない、公平な眼を以て見れば、一方で有と掴んで行つたので、一方が無になつて淋しくなつたと云ふに過ぎぬ百姓が景氣が好くて、諸君は青菜に鹽のやうな逆境の時もあるではないか、景氣が好いからと云つて馬鹿喜びをして居ると又當てが違ふ、成程始終儲かる機會はあるに違ひないが、此の機會を捕へると云ふことが、即ち泉聲中夜後、山色夕陽時、山の景色は何時見ても好いが、殊更に日の入相の景色と云ふものは何んとも云はれぬほど美しい感じがする、入相の時に山色を見れば、東山三十六峯又趣が

一層違ふ、朝日を脊中にして居る時に見た東山と、日將に没せんとする時に眺めた三十六峰の趣とは、自ら其の趣の違ふものである、あの叡山などでも、朝日を脊に受けた時に叡山を見れば、只一つの山に見ゆるけれども、日の春く時の叡山を見ると、どの邊に谷があつて、どの邊に木があると云ふことまで明かに見ることが出来る、爾う云ふ機會を以て山を見るが如くに、其の機に投じ其の機會を見て、時節因縁を達観して商人が活動すれば、利益を得られると云ふ之を私は商機と云ふのである。

□岡本米藏氏の成功

今現に北米合衆國、紐育市に紐育土地建物株式會社を創設し、他に

二箇の土地株式會社と製造工業會社とを有して居る、岡本米藏氏は鉅萬の富を有する金傑であつて、世の所謂成功者で即ち商機に投入した人である、岡本氏は明治十三年、播州加東郡上東條村に生れた谷氏の長男である、上東條村は六百五十餘戸の山村で、谷氏は其農家である。祖父の代には庄屋を務めて、里正の位地に居り、村での口利きであつたそうだが、此の祖父が悪くいへば谷家に多額の負債を残した人であるが、善く言へば岡本氏を大成せしめた大恩人である、谷家の總領たる彼が家計の困難に父母が泣いて居らるるのを承知したのは九歳の頃で、彼は父に向い何故に母上が毎夜落涙悲痛せらるゝかと訝り問ふた、其の時父は事細かに谷家の負債が先代から遺されて、今や既に二進も三進も動かなくなつたこと、田畑、山林

家宅までも、債務の抵當となり居ること、現在の状態では早晚谷家は此の住み馴れたる、祖先の墳墓の地たる上東條村を立ち退かねばならぬ、これが、雙親の哀みであると教へられたので、如何に負債の我が家に禍ひするかを感じたのであつた。其の借金といふは當時の金で四百八十圓、今日では五千圓にも當るものと思はれる、片田舎の農家には不相應の巨額であつたのを見ても、什麼に谷一家の困迫が甚しかつたかが判ると思ふ。

時恰も十六歳の春は彼が生涯に於ける一轉機であつた、と云ふのは神戸の伯父が上東條村にやつて来て、谷の父に相談した、岡本には一人も相續者がなから米藏をもらひたいと云ふ、けれども父は承諾する事が出来なかつた、米藏は谷家の總領で、其上彼には大役が

ある谷家の債務を償却するの任は米藏より外にない、彼は谷家の大黒柱である、此支柱を奪はれては谷家は顛覆否没落の運命に立ち至るからと謝した、然し岡本の伯父も多少それは考へて來たので、御尤だ、しかし斯に一案がある、米藏に商業學校を卒業させ、谷家の借金を償却させ、さて其の上で岡本家を相続するとしたらば如何だそれでは異議は無からうと強請した。父が了解する處までは到らなかつた、彼は傍から之を聞いて父上に乞ふた、伯父上の御話通りであれば、谷家に在るより借金の皆済に便である、學問が出來て借金が済まされれば一舉兩得である。父上には此儀御聽許ある様にと頼んだ、其の後父の安ずる爲に彼は一通の證書を入れた、此の證書によつて父の許諾を得、伯父と俱に神戸に往つたのであつた、此の證

書の一件は一郷の好い笑柄で何人も如斯の借金が此の一片の證書、而かも十六歳の少年の誓ひに因り償はるべしとは信じなかつた、之を確信したのは唯一人の父谷杉松氏ばかりであつた。伯父に伴つて上東條村を辭する時、神戸に出づるに一二の山を越へなければならぬ、其の峠の絶頂に立つて彼は上東條村の方に向いて大地に正座し、叩頭再拜したので、伯父は驚いて何の爲にと質された、その時彼は感然として、「されば兒が伯父上に従ひ参りましたのは谷家の借金を償却いたしたばかりにまゐりました、債務だに清算償却しましたら、今一度懐かしき故郷にかへり、今一度父母の喜び給ふ其の慈顔を拜し度く思ひます、されども、萬が一にも此の債務が辨償の出來なんだ曉には再び此の峠を越えまじと誓ひます、此

の期に於て我が家の棟の見ゆるを幸ひ、最後の御暇乞ひをいたしました」と、對へたれば伯父も暗涙に咽ばれたと云ふことである。彼は程なく商業學校に入學した、間もなく學期も過ぎて夏季休業となつたが、養父は彼を神戸の栗棟回漕店に丁稚奉公に出してしまつた、けれども彼は實業を重んずる主義であると首肯して、此の休暇を送らんと決心したけれども、商業學校を退學せしめられたのを知り、一時も油断はならぬと思つて、一日主人に暇を乞ふた其の訣別の一言が振つて居る、曰く、「昔者明智光秀は三日天下を有つて天下の味を嘗めたと申すことがある、私は御店に奉公すること一七日、丁稚奉公の味は十二分に承知いたしましたれば、これにて御暇頂戴仕る」と言ひ捨て去つた、養家に歸ると、「親の命を無視する不孝者奴」

と父は非常に激怒した、然し彼は父に向つて告げた、「商業學校は兼ねての御約束なれば實行して下さい、但男子已に十六歳となつてから、おめく家産に依頼すべきでない、以後は學資自辨の勤學を志したい」と申した、父は「生意氣を云ふな、學校出の人物は實際用がない經驗が實學である、且つ學徒でありながら學資自辨などは片腹痛し、益々以て不届なり」と叱られた、親に抗辯は無用であると觀念した彼は到底意見の一致點がないから、約りは當初縁談の御約束に違へばと云ふので離縁といふ最後通牒を提起した、父も道が此の一條には當惑して、それほどまでに云ふなら、男の一言、よも反古にはすまい、學資自辨で遣つて見よ、此の一言を難有頂戴して彼は高等商業を終るまで獨立自營の大生活に入つた。

直ちに自活の方途を案じて、雜貨行商業を實行した。先づ神戸の附近から始める、一日一圓か二圓の純益を得、傍ら人情風俗を察し、將來家債を償却するの地をも觀し、名所舊蹟をも弔つた。行商はなかく苦しい、然しながら彼には此の上もなき修養であつた、一日大和に笠置山の行在所の迹を訪ふて、

「さして行く笠置の山を出でしより天が下にはかくれ家もなし」の御製に想到した、又佐渡に渡つて順徳院の御陵を拜し、一日行商を廢して其の英魂を弔うて、「鳴けばきく聞けば都の戀しきに此の里すぎよ山時鳥」の御歌を味つて低徊し去る能はなかつた。一天萬乘の天子、竹の園生の御方でさへ時を得させ給はねば此の如き悲しき御境遇にも立たせ給ふことあるに、一介の臣民に學資自辨の修學行商

は分に相應しき行動にこそあれ、天をも地をも怨みん、感謝の外に何物もあらじと氣を引立てたのである。彼は大望を懷いて學校に通ふかたはら、内地の津々浦々までも行商し觀察して、遂に高等商業を無事卒業した、二十五圓の月俸で、神戸川崎造船所に入つたが、それも米國行の旅費を得んが爲である。然るに二十五圓の月俸では到底宿望を達することは六ヶしいと判つたので、一日川崎副社長を訪ひ、出し抜けに、「先生、何卒三等切符で紐育までの旅費を頂きたい」と請ふた、川崎氏はたい貫はうといふのかと聞き返し、何故、質された、自分は到底返金の見込なきによる旨を應へた、副社長はそれならばとて一包を與へられた、展きみるに千圓の一束である、彼は是は少々多きに過ぎますと大かた言ひかけたが、却つて失禮

と思つて差し控へ、恭しく頂戴して宿に下がつた、其の夜はとうとう眠らずに考へた、此の貧乏國の金を米國へ注ぎ込むのは不經濟である、相成るべくは、米國に散ずる所を最少限に辛抱して、本國に活かして置かうと工夫し、千金を折半し、内百圓を谷の父上に送り別を叙して、之を日常の小遣に供し、乃至は債務の利子にも加へられんことを請ひ、他の四百圓を東京在學の弟、妹に送り、平生の志を述べ、且つ目的を達し得ば再び歸朝するけれども、不幸にして志を得なかつたならば彼士の鬼と化し去らん、慙らん時、兄の志を哀みて谷家の借金を償還されたく、此の期に於て兄が最後の一言ぞと認めて、さて心置くことなければとて明治三十七年十月一日横濱解纜の汽船に搭じて九千五百哩の遠き米國に消え去つた。

紐育に付て自己の運命を開かん爲めに、兎やせん角やせまじと思ひ煩ふ内に、不圖思ひ浮べたるは亞米利加貿易會社社長ジエームスアルモアス氏のことである、同氏は曾て我が横濱に在りて、日米貿易に功勞があつた所から、先帝に勳二等を頂いた巨人である、此の人に求めばやと此の會社を訪ふことに決心した。

ジエームスアル、モアス氏に會せんと其の社を訪れた、刺を通ずる時きに、給仕が中言した「ナニ貴様は日本から來た、此の多忙なる紐育の真中の大會社に見參して、社長殿に面會せんなど、チト贅澤である、支配人位で勸辨して置け」とやつた。彼はすかさず「支配人には折悪しく用がない、社長に用あればこそ面晤を求むれ、若し全く意を通せぬとならば二日が三日でも此の玄關に立ち盡くす

ぞ」と東洋流の一喝を報いた、すると溢々ながら取り次いだ、社長がそれでは詮方がないから會はう然らば詮方があるから會つて上げようと黙答して、導びかるゝまゝに社長室に入つた。講堂の様な大廣間に自分より約四倍半大の容積ある、社長が電光の如き一瞥を與へて、

「貴様は何處から來た」、「日本から」、「それは判つて居る、何しに來た」、「御社に奉公に」、「誰が傭ふといつたか」、「憚りながら私が」と問答が吐の間の間である。

社長の御機嫌斜めに、「汝の様な拙い言語で、風習の異ふ此の紐育では勤まらぬ、社には用なし、立ち去れ」、すげない挨拶で、社長は否決した、然し米藏はまだ否決されてゐない、社長の宣言を輕くな

がして、さて仰ぎ見て満腔の誠意を以て社長に言つた、

「恐れながら社長の唯今の御一言は間違つて居りませう、私は物覚えあつて以來、不正直なことはしない、一度も虚言を吐かぬ、此の用意で爲したる事には必定神の恵みを受けて來た、今やはるく海を航つて御國に參り、貴社に奉公せんと志してゐる、たとい社長が求められなくとも、私が誠心誠意を以て貴社に奉公いたしたなら神は必ずや貴社に向つて、私の働いた報酬を惠まるゝことと思ひまするが、尊意如何」と詰めかけた、社長、之には應へずして、「汝は文字が書けるか」と尋ねた、彼は「唯十人並以上にかけます」、「文章は」、「之も十人並にはやります」、「然らば此處でかいて見よ」、紙と筆とを突きつけられた。

彼に取つては試験らしき始めての試験であつた、一生一代の大試験である、油断があつては運命から見捨られるのだと、細心に注意して、遂に自己推薦状をかくことに決し、是までの修養の限りを盡した、要するに「私は一生懸命で御社に奉公いたしまするに因て、貴下は一生懸命多くの俸給を私に下さる様に」と望んだのであつた、此の時社長は始めて破顔微笑し、一と先づ宿に歸つて命を待てと遣りかへした、彼は宿に歸つて、旅館の窓から郵便配達夫を一人づつ計へて居たが遂に次の一書を得た、明朝試みに會社に出頭せよといふ事であつた、それが丁度十一月三日故國の天長節の日である「占めた」とばかり會社に出頭すると、既に準備は出来てゐる、二百人も事務室に事務を執つてゐる。中に一席空位がある、それが彼れの

座である、見渡す所、同胞は一人も居ない、盡く是、紫髯緑眼の外
人である、彼は決心をくりかへした、此處は自分の修練の地である
よし火の中水の中、鍛へにきたへた神州男兒の眞骨頂を發揮して見
せよう、不幸にして自分に過失があつたなら、それこそ自分一己の
汚辱でなくして、我が大日本帝國の恥である。いで目覺しく働きて
此の國人を驚かさんと。多年練達の手腕に燃りをかけて事務を裁斷
する所、快刀亂麻の概、卓上に堆き書も一掃すでに空しといふ有様
である。毎週木曜日は俸給日で、始めてお婆さんから一袋の週給を
與へられた、中を検すると五弗札一枚が實質であつた、人に問ふた
此の給料の紐育に於ての地位を、答は當地での最下級だとあつた。
彼はア、神に謝すると言つたので、人は訝り問ふ、彼は答へて下の

様に言つた、最下級なれば此のうへ下る憂ひなし、上る一方と思へば感謝の外はないと。

然し一週五弗では人らしい生活は出来ぬ、場末の下宿の物置の二疊計りなるを下宿とした、窓は唯一個の小さな、光線も通氣も不自由な、學校で衛生など講せられたが、それは唯贅澤な生活の出来る人へのみ通ずる議論であつて、餘儀なく頭を窓外に運んで、空氣と日光とを受けらるゝの事である。五錢の電車賃にも事かぐ、親譲りの電車にのつて、晝食が五錢のサンドウィッチ一片、いかに五尺二寸餘りの小男なればとて、サンドウィッチ一片では腹はふくれぬ。

然るに月餘にしてクリスマスを迎へた、他の社員は一同にクリスマスプレゼントを貰ふ、けれども彼は半年未滿であるから、之に與ら

ぬ、かくお婆さんに曉されて一袋を懐にして歸つた、囊中を探れば怪しきかな五弗札二枚、彼は疑はざるを得なかつた、そは一週五弗の給料が一個月たつたかたゝぬに二倍に變ずる理由もなからう、恐らく日本民族を不正直視する外人の試験にかゝつてゐるのであらう、五弗の紙幣は重寶なれども、信用は自分の生命である。此のまゝ受けては一大事と二千五百年來の遺傳的猜忌心を振ひ起して一應之を會計課長に突き返すことにした。

彼が之を會計課長に突き返すと、先方では、なに社長の特別の思召で汝の給料が倍加されたのだ。遠慮はいらぬ、受けておけといふのである。ア、亞米利加と云ふ國は簡易な國だ、之を日本に於てしたら、一圓の増給でも三角な文字や四角な文字をかきつらぬ、西國巡

禮の脊中に負つた如な印章を捺した辭令といふものを戴かなければ徒では一文も戴けぬに、聞きしに増る簡易な國かなと思はずには居られなかつた。

五箇月の後には、彼の俸給は益して二十弗となつた。さきに十弗となつた其の日から貧民の資格は已に消滅したのである。正に一年といふ時、給仕が、「岡本君、社長さんが一寸来い」と通告に来た、「御座つたな」と思つた、自分が外國人でありながらトン／＼拍子に昇進したから、又何かの障礙が出来たかと、一度は心配してみたが、待て、待て、自分は一點の疾しい所もない、假令社長から免職を宣言されても、自分は決して之に服せぬといふ腹を定めて起つた、社長室のドアを押すと、一年振りに社長の偉大なる人格に接した、

陽氣は何となく春である。

社長は近づくや、否や握手して、何とも言へぬ親しみを表した。社長は曰はく、「余は汝を信ず」と。且つ、「汝は入社の際に聲言した以上を實行した、凡そ人間は心に考ふることゝ、口に言ふことゝ、身に行ふことゝが一致しなくてはならぬ。汝は此の三點の一致する、得難い青年である。我が社の寶である。今日以後汝を正社員とする。一個の事務を分擔させる。事務は日本に對する機械の輸出である。之に對して副社長の隣りに一室を用意した。専用の電話と、一名の書記とを與へる。俸給は一週に三十弗。賣り上げ利益の割を配當金として與へる。旅費と日當と交際費とは汝が良心の許す丈けに取れ、精勵一番やつて見よ」といふのであつた、彼は感激して、新し

き任務につくの決心を堅くし誠心誠意事に従つた。其の事業は米國の著名なる會社、製造家、發明家、機械學者と會見し、來往し、懇親を結ぶの機會を作つたので、彼が今日米國で立つ素地の大部分は此の時に於て造つたのである。

此の四年目の一日懐かしき父、十二年來、否十九年來一日も、彼が念頭を去らぬ父の手紙を拜した、何時になく内容が充實してゐる。急ぎ披き見ると、先づ十二年前、岡本家に養子に行く時に父に入れたる一枚の約定書が縦横に書き消されて封中にある。彼の胸は躍つた、假名文字を辿つて読みもて行くと、時候の挨拶から始つて、約定證返却の一段に及んで居る。

御許の多年の苦心が愈其の果を結んで、垢のつかない亞米利加の正

貨、積り積つて七千八百圓を受取つた、六百五十戸の上東條村の中で鏝一文も借金のないのは唯我が谷の一户のみとなつた、谷家の借金清く償却されて、實に吾々御許の父母は此の嬉しさに毎日泣いて謝して居る。御許は自分共の子ではない、御許は谷家の守りの神様である。御許の父母は御許の寫眞を神棚に祭つて、毎朝かけ膳をすゑ、一禮の後でなくては箸を執つて居らぬ。亞米利加の方とさく東の方へは足を向けては寝ては居らぬ。何といつて謝しようか御禮の辭がないと、いふのである。

之れを讀んで泣かぬものは人でない。況や當局の人たる彼米藏氏に於てをやである。此の書を得て暫時の間は感涙にむせんだ。無理もなき話である。十九年來の宿望一時に達したので、親の喜びは言

句の外であつた、何處に其の子を神として祭る親があらう、泣かざるを得ないのも道理である。

愆く大悟徹底した彼は卒然、米國貿易株式會社を辭して一社を驚かした。彼が辭意を表すると社長は大に之を哀んだ、彼に問ふ、「日本人で外國人の建てた外國の會社に這入つて、君が如く短日月に昇進した人が他にあるか、あらば教へて貰ひたい」、彼は、「恐らくは他にありませんまい」。又問ふた「日本人で外國人の外國の會社で、君の如く信用を博して居る者が他にあるであらうか、あらば教へて貰ひたい」。彼は「齋しく他にありますまい」と對へた。「さらば何故に此の會社を退くか、俸給が低いのか、重役になりたいのか、一體何の不足ありて、此の擧に及ぶのか、君の心は迷つては居ないのか」と衷心の誠

を述べて留められた、鐵石心の岡本氏には自己の決心を翻すほど杜撰な思慮の人ではなかつた、爲めに到頭辭職してしまつた。

彼が辭職には一大哲學がある、凡そ人間は常に一定の重荷を双肩に荷はなければならぬ、双肩に此の負荷のない人は浮浪人であり、徒爲の人であり、危険の人であり、人間として少くとも價値のない人である。

双肩の負荷が大で且つ重ければ重い程偉大な人物である。彼が十九年來の負荷を卸して、更に新しき、更に一層重く且つ、大なる負荷を求めんとするは自然當然の要求といはねばならぬ。

此に諸君が特に推服する一點は、彼が敬虔の極めて貴きことがあります、一般の人は會社の事にたづさわり乍ら新しき負荷を探がすで

あらう、それは不徳とする人は一人もあるまい、けれども彼は之を許さない、彼が良心は自己の新らしき負荷を求めながら社務に従ふは、社に對して不忠である、二心を懷いて事を處する者があるといふ理會である。此の理會は彼をして山よりも高い海よりも深い恩義ある、ジエームス社長の恩命を辭した所以である。彼は退社して根本的に、自己の使命を考へた、向後の負荷を求めた自分は十九年間一日も此の債務の償却を念頭より放つことが出来なかつた、今や此の債務は皆済された。而して此の使命は正に終つたのである。余が身體は猶ほ春秋に富んでゐる、未だ一回も醫につかぬ、人はいふ君は八十五歳の長命を保つべしと。願くは之を實ならしめんか前半生は家債を償却した。後の半生は當然國債を償却せね

ばならぬ。日露戦後の我が國債は山の如く積んで二十數億圓、國民の此の重荷に窘むこと十年一日の如く、利息に對する正貨の流出年々數千萬圓、正に是れ邦家の由々敷大事である、報國の義務とは之に當ることである、成功とは此處に存せねばならぬ、米藏もし幸にして幾分にては此の國債を償却し得ば什麼に溢々固く結んだる日本民族の顔と雖も破らざることなからん、我國の國債償却、これが我が使命なりと悟つたのが、彼が二十八歳の青年盛りの日であつた。此の重且つ大なる使命を果さん爲に、如何なる事業を企畫すべきか彼は二箇年の歲月千々に心を砕いたのであります、沈潜思想した結果が下の通りである、若し人にして最確實なる、最大なる富を作らんとするならば世界の中で最大なる都市、而かも春春妙齡の都市若

くば其れ以下の幼少年期の都市で、最大なる未來を有する都市の場
末の地所を購入し、地價の昂騰する迄、農圃として持續することを
得ば、それこそ十年乃至十五年にして資本に十倍、五十倍、百倍の
富を作るは極めて容易である。此に於て彼は世界中の有望な都市を
調査して、其の最年少者であつて、最有望な、此の二個の資格を有
するものを北米合衆國の紐育と斷定したのである、そうして彼は此
の紐育市外の土地を買収して自家の使命を果さんと決心した。
さて大體の見當は附いたが、肝腎な一要件が未決のままである、そ
は紐育州法に於て、外人の土地所有權が未だ確實でない、彼は此の
所有權を確實しなければ此の事業は成立せぬと見て取つたから、百
方苦心の末紐育州の議會に、外國人土地所有法案を提出せしめ大多

數を以て、紐育州の土地は何人と雖も之を所有し之を賣買し、之を
讓與し、之を繼承し得と云ふ所の州法を確立した、これ實に彼が三
十歳の時にして、一百万弗の資本を以て紐育土地建物株式會社を創
建したのである、紐育市のウルウォースビルディングに本社を置き
二個の出張所をニュウジャーシー州に置き、他に故國大阪市東區高
麗橋二丁目に社長出張所を置いて盛に營業して居るのが彼の紐育土
地建物株式會社である。
岡本氏の人格はとにかく此れを事實として考ふれば此れこそ商機即
禪機に投じた人である。春風秋雨十有餘年前、極めて乏しき苦學を
した時の事を思ふと實に感慨無量であるであらう、此の岡本氏こそ
永年の間、刻苦勉勵して時節因縁を達觀し其の機會を見て遂に機に

投じた人と云ふのである。禪の修行をして禪機に投ずるも又この通りである。

□萬事に機會あり

機會と云ふものは何處にもあるのである、分り易い例を以て云へば例へば私は何時もお客にばかりなつて居るので、お給仕をして貰ふが、其時に色々の人が出て給仕をして呉れる丁稚さんみたいな人や女中もすれば、奥さんもして下さる、御飯をつけて貰つて食べて居ると、まだ口でモク／＼やつて居る内に、サアおかへなさい、／＼と云つてお盆を出す。これには大きに困る、急しくて喉へ悶へるやうな氣がして、折角の御馳走も美しくない。さうかと云つて食べて

しまつてお箸を下へおろして居るのに、一向お盆を下へ置いたきりで、ポカンとして居られると、待遠い様な心もちがする、矢張り是れは其の機會を見ることが大切であつて、此のお椀を下へをろそうと云ふ泉聲中夜の後、箸を下へ置かうと云ふ山色夕陽の時に、一寸お盆を出して呉れると、えらい工合が宜い。お給仕をするのでさへ泉聲中夜の後、山色夕陽の時を見はからつて、お盆を出さなければならぬ、錢が欲しいからと云つて、

「サア下さい／＼」「金はないか／＼」

そんなことで金が儲かるものか、三度の御飯のお給仕ですら、泉聲中夜の後、山色夕陽の時、この機會即ちこの時節到來を達観して、お盆を出す所に、お客の人が好い心持で、「それではもう一膳頂戴い

たします」と氣持よく出す、斯う云ふ調子にやりさへすれば、商法家と云ふものは、面白い心持を以てやつて行くことが出来るだろうと思ふ。その機會を捕へた所の人が、皆な成功して居る、此の商機即禪機そのまゝ禪機と達觀してやつた人は皆な成功して居る。此の禪機を達觀した力を以て商業をなし、商業を達觀した人が坐禪の修行をする、どちらにしても成功するだらうと思ふ。所が其機會を捕へることがなかなか難しい。お客人がまだ半分程しか食つて居らないのに、「サアお出しなさい」と云つてお盆を出すのは、機會に投じたとは云はれない。勿論食つて了つてモジ／＼として居ても、ポカ／＼として居るやうなことでは、機會を捕へたとは云ひ得ない。寔に此の機會を見ると云ふことは難しいことであるが、巧に此の機會を

見得る人が、即ち大機に投入した人だらうと思ふ。近頃或つたらぬ雑誌にも爾う云ふことが出て居る、某といふ人が、どうも今は船の方に手を出したなら屹度利益を得られるに違ひないと云つて、或會社に居る人が船に關したことを始めて、僅の間に六百萬圓かの利益を得たと云ふことがある。須く爾う云ふ調子でなければならぬ。心を静めて、將に中夜の後泉聲を聞くが如く、夕陽の時山色を見るが如くに、其機會を捕へんとして沈思冥想し、少しの油断なくやつた人が、即ち成功するのであるが、去りとてあの人はどうも旨いことをしたから、私も一つやりませうと云ふて、ソロソロ始めるのでは、疾づくに機會ははづれて居る。爾んなことをした所が三文だつて儲かるものではない。此の機會を捕へると云ふこ

とが大切である。之を達観することが大切である、例へば私が一生、懸命に話をして居るのに、氣持よく眠つてゐる人が居るとすれば、その人の目を覺すには、横面を張つたつていけないが、芋をやつてみると、直ぐ目を開ける、と云つて何時でも焼芋をやりさへすれば宜いかと云ふに、決して爾うではない、今門に立つて三つばかり食つて來たとすれば、今やつたところが、「もう宜しうござります」と云ふに極つて居る、機會を見ることが大切だ。お茶を一つ出すにしてもさうだ、去年の夏お客さんの來た時に、氷水を出したら、結構だと、云つて大變喜んだからと云つて、冬の寒い時分にそれを、夏よりも二三杯よけいに出したらよからうと云つて出すのは愚の骨頂だ、冬お客様がお泊りになつた時に、熱い〜お茶を上げたら、大

變喜ばれたからと云つて、夏の眞盛りになんか出るのは馬鹿だ、是亦時を知らぬ奴である。一遍喜ばれたから何時でも其通り喜ばれるだらう、某が糸で儲かつたから、吾輩も糸を始めたら宜からう、と云ふのは時を知らぬ人のやることである。私共のやうに局外から見ると、能く爾う云ふ頓珍漢をやる人が往々ある、全く馬鹿げた話である。斯う云ふ工合に時節因縁を觀察せずして商法をやつて居る人は、生涯働きたがら損ばかりして居る。斯んなに働いて居るのに損ばかりしてどう云ふ譯でせうなどと云ふて居るが、其れだけの理窟が分れば何でもない事である。即ち泉聲中夜の後、山色夕陽の時、之を味はつて見れば、一面禪機の妙味も分れば、又一面商業の機會と云ふことも、之に依つて行かなければならぬと云ふことも

知らるる。此の禪機と商機とは、この儲けた人と損をした人とを比較して見て、尙其上之を吟味して、見たならば、一層分明になるだらうと思ふ。

第五 何にか活動の原動力と云ふ乎

□ 至誠

此の機會の機は動くうごくと云ふ意味がある。機は機關なり、機略なり、要會えうくわいなり、カラクリなり。と云ふやうな説明があるとするれば、結局此の商法家の動く機械及び禪的修養法の心の上の働きは、其の精神的活動と物質的活動とを論せず何等か其所に活動の原動力とも云ふ

べきものが有に違ひない。而して何をか原動力と云ふべきか商法家の活動する所の原動力は、禪的より見ても同様、其の根本、原動力なるべきは只「至誠にして動かざるものは未だ此れあらざるなり」、で誠である。眞誠である。その誠より出て来た活動をすれば、一時は損を致しても、實價は結局最後の勝利となる。至誠を以て商業をしてそれだけの實價があるとするれば、必ず最後の勝利を得るに極めて居る、今損をして、今利益を得ないでも、實價は最後の勝利なり、胡麻化して一時の暴利を得たからと云つても、それは正當の利益でないのだから、必ず其の人が長く榮えると云ふ道理はない。又禪々と云ひますと、禪と云ふものは大變難かしいやうだが、禪宗の修行も亦此の至誠を體現するに外ならぬ、誠の修行である。而しな

がら、誠と云ふものは、誰でも知つて居ることだが愈々實行となる
と出来難いものである、「僕は誠意を以てやります」とか、何んとか云
ふのは人の口ぐせであつて、斯の如き人に至誠の念の毛頭なきは克
く實驗するところである。

□人間は嘘吐動物

人間位嘘を云ふ動物はない、人間の作つた字に、商法家の最も喧し
く云ふ信の字がある。之れは人偏に言と云ふ字が書いてある、人の
言葉には、苟も人間の云つたことには決して間違ないと云ふ意味で
人間の言葉と書いて、信用とか、信頼とか、信仰とか、信任とか云
つて、是れは萬代不易の間違ない所の眞理として、之れをマコトと

も讀ませてある。間違のないものは人間の言葉であると云ふまでに
此の文字も拵へてあるが、之れは犬や猫が吾々に奉つた、ものかと
云へばさうではない。又は一般の動物から、走獸飛禽から斯う云ふ
字を作つて、人間と云ふ動物は、約束通りお守りになるから偉い、
それだから人と云ふ字に言を書いてマコトと讀むように、吾々以下
の動物から吾々に獻じたのであるかと云ふに左様でもない。人自ら
書いたのだ、人間ぐらゐ嘘を吐く勝手な動物はない、儲かるだらう
と云つて約束して置いたが、一寸困つて来たからと云つて、胡麻し
て見たり、不渡りの手形を書いて見たり、自分勝手なことばかりや
つて居る、誠も何もあつたものか、人間ほど嘘吐く動物はあるまい
今度の御大典紀念として信と云ふ字を作り變へて、矛扁にした方が

餘つ程氣が利いて居ると思ふ、上から下まで嘘ばかりの塊が人間である、殊に實業家なんかは、嘘を上手に吐かなければ成功せぬなど云つて居る。商法家は元來嘘を云ふものであるなどと云つて居る人があるが、それは昔のことだ、今の時勢に嘘を吐いて成功したよなもののは泥棒ぐらゐなものだ、然るに人間は相變らず嘘を吐いて代議士や縣會議員に成つて堂々と、嘘を吐いて金儲けをするが、犬や猫を見るに犬は門を守り猫は鼠をとり、牛馬は重荷を負て人の力を扶け須臾も怠る事なく至誠に働いて居る、それであるから終に、犬猫が犬猫仲間へ顔出しがならぬと云ふて逃隠れした事もきかず、犬や猫が獸物仲間の見せしめに首きられた事もない。昔から犬はワン／＼猫はニヤン／＼、雀はチュウ／＼、鳥はカア／＼、柳は緑花

は紅松の木まつのきの曲まがむも杉すぎの木きのの直まっぐいも大根だいこんの長ながいも蕪かぶらの短みぢいも、終始一貫して居る、何處までも變らぬものである、彼等は嘘は吐かない、だから此の信用の信と云ふ字は、一層人間のことはあてにならないから、才偏けものへんに言いふ、若くば鳥偏とりへんに聲こゑ、にでも書き直した方が宜くはないかと思ふ。人間の言葉と云ふものが、一番當てにならぬ。それだから、諸君は命より二番目の金貨をば、始終取扱ふて居るのですが、人間の言葉を當てにしてやつて居たなれば、随分損をする人が澤山あるだらう、商人といふものは嘘を吐くようなことでは駄目だ、程好くやらなければならぬ、けれども又此の程好くと云ふことが大變難しいのである、程好くと云へば直ぐ體裁の好い嘘を吐くと、心得てゐる。あの人は程好くやるだの、其處を巧くやるから偉

いと云ふのは、嘘を吐くと云ふ代名詞になつて居る、實にどうも淺間しい有様になつて來たのだ犬や猫と云ふものは喰付合はやるけれども、胡麻化しはやらない、彼等は至誠にして動いて居る。決して嘘がない、然らば人間は是れぐらゐ他人に對して嘘を吐くが、自分に對しても矢張り嘘を吐くかと云ふに決してさうでない。

□自己に向ては嘘言なし

自分に向つては決して嘘は云はぬ、人の爲めになると云ふと、當にならんことばかりやる。偽りのことばかりやるけれども、自分のことに就ては嘘はない、坐眠りをして居る丁稚さんなどがよく脊中を搔いてゐるが、誰か搔いて呉れと云ふたからとて搔くでもなければ、

ば、斯うして搔いて居れば、年末賞與に襦袢が一枚餘計貰へるだらうの斯う云ふ工合に搔きさへすれば、人が賞めて呉れると云ふではない、痒いから搔く、痒いと云ふことは誠だ、それから何時でも搔きさへすれば宜いかと云へば、爾う云ふ譯でもない、矢張り泉聲中夜の後、山色夕陽の時、ムヅ痒い所を搔くと云ふところに餘人所不見の妙所がある、此所に禪機といふものが知すゝの間に現れて居るのである。痒い所を搔くが如くに、萬事が觸處觸處に眞情流注して往かなければならぬ、大方此の邊が痒くなるだらうと云つて、十日程も前に、今日は暇だからと云つて、搔き置きをして置くことは出來ない、これも矢張り機を見て搔かなければならぬ、世間には遺書をすると云ふことは、能く死に際にやるが之は機を得た仕方であ

る。けれども痒い所を此邊が明日頃痒く成だろうと云て、今日の中に思切り搔いて置かうかと云つて搔置する事は出来ない、矢張り泉聲中夜の後、山色夕陽の時、ムツ痒いといふ時に搔きさへすれば、氣持よく搔くことが出来る。斯様に自分に對しては嘘と云ふものはない皆な至誠から來て居る、誠である、偽りや體裁でない、此手が斯う外に向と云ふと、直ぐ嘘を云ふけれども、此方へ向つた時には些とも、嘘はない、グツスリ寢込んで居る時にでも、脊中が痒ければ、頼まれずして手は自然と痒い所へと行く、全く自分に對しては親切なものである。自分のことには左様に親切だが、この手が一つ彼方へ向くとなか／＼爾う云ふ譯にはいかぬものと見える。それであるから人偏に爲と書いてイツワリと讀む、人の爲めにする

ことは嘘だ、とは餘ッ程面白い。この言葉は、是れこそ動物の方から吾々に奉つたのかも知れない、私はどうでも宜しいが、此組合の爲めだとか同業者の爲めだとか云つて威張つて居るけれども、皆な嘘だ、人偏に爲と書いて偽りと呼んで居るぢやないか、人の爲は偽なり、少し立入つて考へて見ると、本當に人の爲めを思つてやつて居るものはない。

「情は他人の爲ならず」とよく云ふてある、人の爲に親切にしたことが自分の爲めになるのだから、人の爲めに益するは結局自分の爲めを思つて居るからだ、「僕は人の爲めに働いて居る」「私は人の爲めだ」と云ふけれど、ナーニ皆な自分の爲めばかりだ、それだからこの手が自分に對して親切なるが如くに、嘘、偽りがないとすれば、

此の至誠より動いて行けば、損をしても、得をしても、必ず平然として悠々として、日常のことをやつて行く餘裕と云ふものが出来るらうと思ふ。

それを偽つて、人目を胡麻化して、好い加減なことをして、錢儲けをしやうと云ふことは、大なる間違だらうと思ふ人間は飽くまで正直でなければならぬ、此の正直と云ふ事は、心と行とに表裡のないのである、正直は一切の道徳の基礎であつて、萬善の源である、其の心不正直であつたなら、如何に巧に諸道を守ると雖も、是れは偽りであつて偽善は却つて其人の卑劣輕薄を證明するものである、商業道徳の基礎も亦此の正直にありと知らねばならない、若し商業家が賣買の上にて能く正直の道を守る事が出来得るならば、其人一

人の幸福のみに止らずして、社會全體は廣く其の利を受ける事である、例へば商業家が互によく其道を守り、其の品質に於ても、其の内容に於ても、其の價に於ても、其の約束に於ても、其の保證に於ても、其の云ふ所が正直であつて決して詐偽苟且の言がなかつたならば、顧客は之に對して一々信用し、不安の心をなくする事も出来又相方時間上の經濟ともなるのである、更に又相方勢力上の經濟ともなり又此等必然の結果として、商業上の取引賣買は大に敏捷な活動を見る様になるのである故に商業家が能く正直の道を守るは、個人としての利益なるに止まらずして、社會國家の福利を増進するものと云はねばならぬ。

我が商業家が取引賣買するのを見るに、利益の前には殆んど徳義の

何物たるを知らない、巧妙な手段を弄し卑劣な驅引をして以て、僅ばかりの利を争ひ、商業家の能事畢れりとして居る。私は其の見地の狭くて小なるのを悲むものである。なせかと云ふに、我に増せば彼に減じ、彼の小は則我大、我の富は則ち彼の貧なるばかりで、一身一家の、上より見たら、一圓高價に賣つたならば一圓の利がある十圓高價に賣るならば十圓の利はある、けれど若しも社會國家の上から、見たならば、社會國家は毫も其利益を受けて居らぬばかりでなく、此の間に於いて相互が時間及び、勞力の上に於て失つた所は更に、多大なものゝある事を考へなければならぬ。

今日諸君が見て以て財として居る所のものは、必しも一つの金錢のみに限らない、すべて動産、不動産は勿論の事ながら、時間勞力の

如きも最も尊重すべきものなることを知らねばならぬ。些少の利益を、貪らんが爲めに不正の手段を弄し、而して此間に相互の失ふ時間と、勞力との遂に恢復すべからざることを注意せねばならぬ、若しも商法家はすべて正直なものであると、定つて居るならば、吾人は或は物品を購はうとして、其品質其内容其の價格に於ても、自ら更に之れを鑑定せないでも、安心して之を購入する事が出来、又其約束其保証は何の疑をも挾まずして、之を信じ之に委任することを得るのである、又物を購はんが爲めに自ら此等の勞を省き、子供下女を遣はして用を辨することが出来るのである由來日本の商法家が金錢を以て唯一の財とし、其の他殊に尊重すべき時間、勞力の一種の財寶たる所以をとるものは極く稀である。又個人及び、一家の利

益が常に経済活動唯一の動機となつて、社會とか國家を度外に於て顧みない様な傾がある、是れは國民が經濟思想上大なる缺點である、商法家の此の舊思想は、全然時勢に背馳せるものなる事と考へなければならぬ。

□ シンセラ

私は英語は少しも知らんけれども、英語には昔古い羅甸語や埃及語がある、誠と云ふ言葉を、「シンセラテイ」としてある、「シンセラテイ」と云ふことが、日本の所謂誠と云ふことになつて居る、又「シンセラ」^(Sincerity)と云ふ言葉がある、それは如何なることかと云ふに、なか味ひがある「シンセラ」と云ふことは、日本語に譯すると、

無蠟といふ、蠟でない、白蠟でない、と云ふことだそうだが「シンセラ」と云ふことが、何故白蠟でない、蠟細工でない^(Sincerity)と云ふことが誠であるかと云ふに、これは羅馬の非常に盛であつた頃には、なか贅澤なことをやつたもので、無論建築なども立派なもので、いたる處に廣大な建築が出来てゐたが、妙なもので昔も此の信用のありさうな感じを與へる建築は、どんなものであると云ふたらば、黒塗の土藏のやうな造り、若しくは舊式の暗い奥深いやうな店が、誠に信用をされたものだ、ちかごろはまた信用のありさうな、眞面目な建物は、矢張り御影石や大理石で造つた建築でなければ、信用があるやうに見えぬどうも此のイカサマの生命保険や銀行が、往々煉瓦などで建築して居るが、爾う云ふ會社が澤山倒れると、自然社會

の人の頭に、煉瓦の建物は當てにならぬと云ふやうな感じを興へる日本銀行の建物のやうに、御影石や大理石で造り上げると、あの銀行へ金を預けても間違がないと、好い感じを起す、日本銀行だつて間違のないと云ふことは云へぬだらう、數百年數千年の後にはどう云ふことになるか分らない、けれども同じ銀行でも比較的日本銀行みた様にしつかりした銀行はない、其の日本銀行が大理石を以て拵へてあると、成程流石は日本銀行だと其處へ行つたばかりで信用する。と云ふ所から外の銀行まで、日本銀行式の建物を造れば、何んとなく信用が厚くなるだらうと云つて、建築物などは何んでも宜かりそうなものだが、矢張り爾う云ふ風に真似て建築して、素人の信用を得やうと云ふことになつて居る、何時か私が有名な銀行の支配

人をして居る人に問ふたことがある、「あなたの銀行などは社會一般の人が信用して居るのだから、弗箱一つさへあれば宜いちやありませんか、どうして那んな大きなものをば、京都にも、大阪にも建てゝあるのですか」と云つてお話をしたら、その人の曰く、「それは爾のとほりでありませんが、何分人様の大事な命から二番目の大せつな金を預かるんだから、其の金に對して尊敬を拂ふてだ」と云はれましたが、其れも一理ある。然かし矢張り建築を以て素人を信用さすと云ふことが大切だ、目明千人、盲人千人である、實際弗箱さへシツカリして居れば好さそものだ、結局お預りした人に對して間違さへなければ、それで宜い筈だけれども、矢張りそこは立派な建物など建てゝ、それで以て信用を受けて居ると云ふことに當時で

もなつて居る、當今ばかりではない、羅馬の都もやはりさうであつた、人の信用を得るには、大理石の建築でなければならぬと云つて向三軒兩隣、到る處大理石であつた、處が實力のない商人は爾う云ふ譯にもいかぬものだから、白蠟を以て胡麻化して大理石のやうに見せた、それから白蠟で以て、にせ建築をするものが澤山に出来た、遂にあそこは此度大分立派な建築をしたが、あれは白蠟でない「シンセロー」即ち大理石で建ててあるから、確かなものだ、間違はない、立派な家であると云ふ意味が此の「シンセロー」、無蠟と云ふ意味になつて來たと云ふ事だが、なか／＼面白い事である、彼家こそ胡麻化し普譜でない、カン／＼叩いても、何處までも大理石であるといふ意味が此の「シンセロー」、即ち蠟でないといふ意味である、さ

て日本で誠と云ふことは眞事と書きます、即ち全くのことです、眞の事、それをマコトと斯う讀んで居る、全くのこと事實である、誠の事實である、して見ると、事實と云ふものは、如何に胡麻化さうとしても、之を胡麻化することは出来得ないもので事實は誠だ、之に就て面白い話がある。

鼻と髪のない夫婦

或處に鼻のない男が居つて、又或る處に髪のない女が居つた、どちらも鼻がなし、髪がないのだから、あれを夫婦にしたら兩方とも工合よく行くだらう、甘い工合に纏るだらうと云ふので、物好きな人が男の方に向つて、「どうだ良い嫁さんが一人ある、髪のない

はないけれども、氣立の至つて良い女だ、それも丸ツきり髪の毛がないのでもない、都合に依つては結ひかたもないではない、不調法な女ではあるが、性質が善いから貰つてはどうだ」と云つたら、「私共のやうな鼻のない所へ来て呉れると云ふなら貰ひませう」と云つて承知した、今度は女の方へ行つて、「どうだ、良い婿さんが一人ある鼻は満足にないけれども、至つて氣立の良い男だから、嫁に行つてはどうだ」

「さうですか、爾う云ふ譯なら喜んで貰つて戴きませう」都合好く話が纏つたので、日を定めて結婚をすることになつた、どうせ好い所ぢやない、九尺二間の裏借家であつたとみえて、冬の頃炭火を起して、何にもないから寒くないやうにと云ふので、酒を飲み始めた、

長屋の連中が五六人坐り込んで、差しつ差されつして居りました、所が嫁さんの方は、髪の毛がないものだから、體裁に鬢付油を付けて、髪の毛を載せて頭を結ふて居るやうな真似をして居つた、男の方はこれ亦、鬢付油で鼻を拵へて付けてあつた。何にかの拍手に女が笑つて一寸頭を振つたら、鬢付油の頭の毛が、ツルリと取れた、「アッ」と云ふたら男の鼻が、又ツルリと落ちた、と云ふお話があります、これは落ちる筈だ嘘の鼻だから、蠟の鼻だから落ちる筈だ、「シンセロー」でない、付けた鼻であります、誠の火にかゝりますとタランと落けて了ふ、世の中には鼻の格好の良くない人が澤山あるうが併しどんなに鼻の形は悪くとも、實際の鼻は幾ら引揉つても取れない、又髪の毛の生え際が如何に悪くとも、少々性質の悪い髪の毛で

も、實際の髪の毛といふものは引揉つても取れるものではない、「シンセロー」、即ち蠟でないからである、誠の髪の毛、誠の鼻は、如何なる時節に會つても取れると云ふことはない、胡麻化しの鼻同様な商法をし、胡麻化しの髪の毛同様な商法をして居る人は、誠の人が來ると、誠の熱度（ねつど）に掛けられると、堪えられなくてアラを出す様になり、赤面（せきめん）をしてお暇（ひま）をせねばならぬやうになつて來る、「至誠（しじつ）にして動かざるものは未だこれあらざるなり」、體裁（ていざい）はなくとも眞實（しんじつ）なる品は、レツテルだけどんなに工合（くあひ）よく貼（は）つた眞實（しんじつ）ならざるものにも勝るのである實價（じつか）は最後の勝利（しょうり）を制（せい）するものであるから、誠實（せいじつ）を以てやつて行く内（うち）には、最初（さいしょ）は損（そん）もして、終（つ）ひには必ず成功（せいこう）するに違（ちが）ひない、此（こ）の信念（しんねん）を持つことが、諸君（しよくん）の爲（ため）に非常に大切（たいせつ）なこと

であらうと思ふ。實價（じつか）は最後の勝利（しょうり）を得るに極（きま）つて居る、至誠（しじつ）にして動かざるものは未（いま）だこれあらざるなり、虚偽（きょゐ）にして如何（いか）程（ほど）大なる利益（りえき）を得たところが、それは眞（まこと）の利益（りえき）ではない、實價（じつか）は最後の勝利（しょうり）なり、蠟細工（ろうさいく）の鼻同様な商（あきな）ひをし、蠟細工（ろうさいく）の毛同様な商（あきな）ひをしたところが、それは、「シンセロー」、即ち全く（まった）の商（あきな）ひをして居るものに向（むか）つては、どうしても最後の勝（かち）を制（せい）することは出來ないのである、今は利益（りえき）を得て居（を）らずとも、今は蠟細工（ろうさいく）の利益（りえき）に負（ま）けて居（を）つても、最後の勝利（しょうり）は此（こ）方に來（く）るに間違（まちが）ひないのだから、大（おほい）に意（い）を安（やす）んじて可（か）なりであらうと思ふ。此（こ）の精神（せいしん）がなかつたなれば、商法家（しやうはふか）が、商（あきな）をした所（ところ）が決して最後の勝利（しょうり）を得（う）ることは出來ず、結極（けつぎよく）詰（つ）らぬことになら、兎（と）に角（かく）是（こ）れは諸君（しよくん）が了解（れうかい）が出來ないかと思ふが、兎（と）に角（かく）商法（しやうはふ）

家が、只金を掴みさへすれば商法家であるといふ考でなしに、如何にもして此の商人らしい商人、所謂紳士的の商人になるといふ事である、高潔なる精神を以て自己の商業に努力することが、大切だろうと思ふのである。

この如何にも紳士らしい商法家の人品を養ひ、人格を養つて行くなれば景氣が好いからと云つても、調子づくこともなければ、不景氣だからと云つて、青菜に鹽のやうなこともない、金は何處にもある金は如何なる處にもない所はないのだから、其の機會を捕えて、泉聲中夜の後、山色夕陽の時を見て、活動して行きさへすれば、損をするも、得をするも、それは時の運で仕方がない否、確かに好運を把握することが出来るのだ、故に此の觀念を持ち大なる信念を以て

愉快に、面白く商法をすることが出来るやうに心懸けるのが必要であると思ふ。

□家康と大樹寺上人

徳川家康公が、三州の大樹寺で、何遍戦をしても勝利を得られぬからと云つて、墓の前で、割腹をして死なうとした、其の時に大樹寺の和尚が、「何で死ぬのか」と云つたら、「斯う連戦連敗しては仕方がありません、逆ももう勝つ見込がありませんから、自殺を致さうと思ひます」と云つた。和尚の曰く、「それはお前は了簡が違ふ、お前が今まで戦ひに勝つたと云ふのが不思議だ、負けるのが當然なんだ」と云ふものは、上は一天萬乗の叡慮を安んじ参らせんが爲め、下

萬民を塗炭の苦しみより救はん爲めにやるものだから已むを得ぬ、然るにお前の遣方はどうだ、お前の遣方は城を取れば宜い、領地を取れば宜い、家來が殖えれば宜いと云ふやうな、剛愎な戦をするから、負けるのが當然である、左様な精神で戦をやつては、到底最後の勝利を得られるものでない」と云ふことを訓戒された、其の一言で徳川家康は、成程それに相違ない、目前の利益を得る爲に戦をしたから、人心を收攬することが出来なかつた、偏に是れは上天子の爲め、下萬民の爲めに、多くの人を殺すも已むを得ない、と云ふ此の精神がなければならぬと云ふことを、大樹寺の和尚の一言で以て覺醒し、堅き信念を持つことが出来て、遂に三百年の太平を保つやうになつたのである、商法家も亦斯の如きものだらうと思ふ、どち

らにしても變らぬのは茲だ、此の呼吸だ、只金が儲かりさへすれば宜いと云ふのではない、それでは道義ある商人たる眞の面目はないと思ひます。

□ 金より大切な忠兵衛さん

嘗て京都祇園の小學校で、皆さんは一番大切なものは何か、何が一番大切か、と云つて先生が尋ねたことがある。一人の生徒が、「先生それは金であります」と答へた、全生徒は悉く金に手を挙げたが、中に一人の可愛らしい女の子が、「先生、私は金ではございません、と云つた、「それぢやあなたは何ですかと先生が反問すると、「皆なが金と仰存なるならば、私は金ではありません」「どう云ふ譯であなた

一人が金でないか」と云つたら「姉さんが金より大事な忠兵衛さんと歌ふのを聞いて居ますから、皆さんが金なれば私は金より忠兵衛さん、忠兵衛さんが一番大切だと思ひますわ」と云つたそうだ。私は此の一言を非常に嬉しく思ふ。今日の社界が、金より大切な忠兵衛さんなど、云ふ意氣を持つてゐる者は見たくてもない。諸君の中には御主人持の人もあらう、又多くの奉公人を召使つてゐる人もあらうけれども、主人も金より大切な奉公人、使はれて居る人も金より大切な御主人様と、云ふやうに意氣を持つて、主従の關係を維持して行きつゝある人が果して何人あるだらうか、金より大切な忠兵衛さんと云ふやうな意氣は主人の方にもなければ、奉公して居る人にもないと云ふやうな有様の世の中になつて來た、又廣告には非常

な大金をかけて立派に出して居るが、實際店へ行つて見ると、廣告に現はれて居る熱心も無ければ活氣もない、小僧さんから番頭さんに至るまで、不精々々に客に接し居るのは、そこの商店で普通に見る所である。甚だしいのになると廣告に發表してあつた條件とか特典とかいふものを店員が全く知らないで居る事さへある、「君の所の廣告に發表してあつたではないか」と客より云はれて、慌てゝ奥へ駈込んで主人に聞質し、初めて夫れと知るといふやうな事が能くある、つまり今日一般の繁昌し居らぬ商店では、店主の意思とか商店の主義方針とか云ふものが、十分に店員に徹底して居ない。又店主が苦心慘憺の結果或る計畫を立てゝも店員に頭惱が無い爲め能く其の精神を呑込む事が出来ず、折角の妙案奇策を滅茶々に毀して

しまふ事がある。斯の如き名實不相應の誇大的 廣告に引かれてこ
う云ふ店へ這入つて往つた客は、何だか氣が抜けてしまふのみなら
ず、「一杯喰はされた」と云ふやうな不安不快の念を起さずには居ら
れない。さりとして店に這入つて何も買はずに出るのは一寸心苦しい
ものであるから、腹の虫を抑へて一度は買ふかも知れぬが、併し客
の心の中には、「二度と斯んな店へ足を入れる事でない」と早くも決
せられてしまふに相違ない。或人の話に某商店の廣告を見て、或る
品物を郵便で注文して、其の廣告には明らかに「御不満足の際は御取
返又は御返金可申上候」と誓つてあつた。然るに夫れを受取つてから
二日目に、其の品物の或る部分が脆くも毀れてしまつた。そこで其
の人は其の部分だけ取替へて貰ひたいと云つて遣ると、やがて係の名

義で返事が来た、取替へるは取替へて差上げますが、もう五十銭だ
け御送金を願ひたいといふのである。ところが其の部分と云ふのが
普通の小賣相場で十五六銭のものに過ぎない、五十銭といふのは一
體何箇分の直段か、而して廣告に誓つてあつた取替又は返金の宣言
はあれは何の意味かと云つて遣ると、間もなく再度の返事が来て、
工場の方へ問合せて見たが矢張り五十銭だけ頂戴しなければならぬ
と謂ふのである。後其或る宴會の席上で件の商店の主人公に邂逅し
た際、何かの機會に申戯半分に右の話しを持出すと、店主は案外眞
面目に受けて、何うも夫れだから弱らされるんです、私等も店の者
に向つて店本位には乃公が遣るから、お前達は唯だお客様本位に遣
つて呉れさへすれば宜いと始終云つて聞かせて居るんですが、私の

精神が何うも十分に店の者に呑込めないと見えるんです、お話のやうな場合には無論お取替へをする筈になつて居るんですが、夫れを其んな馬鹿剛情を張るもんですから 一ヶ月かゝつて辛と此方の物にしたお客様を一週間経たぬ内に失つてしまふやうな事になるんです、イヤ能く打明けて下さいました有難う御座います」と頻りにお詫びやら禮やら云はれたので、其の人は却て痛入つてしまつた、と此んな話は金に積つて見れば殆んど論ずる價值もないが、一店の主義方針と云ふ上から見ると極めて重大な問題である、流石に其店主は此間の消息を解して居る、此の人の態度は立派な商法家の態度である、店員には其の意味が分らないのである。すなはち店員には金より大切な主人と云ふ精神がないからである、金より大事な職務信

用と云ふ心掛がないからである併し乍ら單に店員をして自家の主義方針を知らしめたといふだけの事では何にもならぬ、更に一步を進めて、夫れに對する店員等の熱心を喚起する必要がある、元來店員生活、殊に營業時間を始めとしてすべてにだらしない日本の商店の店員生活は、誠に單調な、無趣味な、殺風景極まつたもので、精神的にも肉體的にも殆んど興奮の要素といふものが無い。一般の店員が精力を缺き、熱心を缺き、陰鬱となり、まるで魂のない自働人形となつてしまふのも、斯ういう境遇の下に在つては實に已むを得ない事である、併し商賣の上から謂へば此れではいけない、客は何うしても快活な、親切な店員の揃つた店へ心を惹かれる。活氣のない無愛想な見ても鬱陶しさうな店員を並べて置くのは、店頭に立つて客

を追拂ふやうなものである、現に店員の營養不良な顔色を見るのが厭さに或る商店へは往かぬと云つて居る婦人があつた、又店員がお客様を御用を勤めると謂ふよりは寧ろ主人に叱られるのが怖さに、何うかして、賣付けやうと焦燥る其のいじらしい容子を見るのが氣の毒にもあり煩くもある所から、或る商店へは決して往かぬと云つて居る紳士もあつた。店員の酷遇虐使は一見内輪の事で、別に外部に影響はないやうに想はれるが、其の實商品の賣上に直接の影響を及ぼすことは非常なものである。

之に反して、店員の間、「満足」の空氣の漲つて居る商店は其の商賣も自から繁昌せざるを得ぬのである。人道とか何とかいふ鹿爪らしい問題は別として、單に純然たる商賣上の見地から觀察しても、店

員優遇の方法も講じて彼等の忠實と熱心とを刺戟するといふ事は繁榮策の一端として必ず閑却すべからざる所である、「殊更店をまかせをく手代には氣をつけ満足がるやうにせねば、何かにつけて徳のゆく様には働かぬものぞかし」と古人も云つて居る。

兎角商家の通弊として、何でもないことを無闇に隠蔽し、然らずんば頭から店員を見縊つてしまつて、貴様達の知つた事ではないといふ風な仕向けをするから、店員の方で折角本氣にならうと思つても頓と張合ひが抜けてしまふ。店員の忠實熱心を買はうといふには矢張り其の代價が要る、其の代價といふのは店主自身が先づ彼等に對して忠實熱心を示す事である、即ち金より大切な奉公人と云ふ精神でやらなければならぬ「人を使はば使はれる」とは此の事を言つたも

のである。

□ 成功する主人のやり方

成功する様な主人はどことなくやり方が違ふので、雇人中に若し怠け者、不平の聲、若くば同盟罷工などのあるのを発見した場合は之を咎むるまへに、主人たるもの先づ自己を顧み、其の使用法其宜きを得なかつたか、待遇法其の宜きを得なかつたかを省察せねばならぬ。兎に角罪の半分は己に在る事を了知する場合が、少くない。世の中には雇主として成功するに必要な使用心得を持つて居らぬ主人も決して斯くはなからうと思ふ、馬の走らないのを見て、己が調御の術の拙なるを思はず、無闇に之を鞭ち、又は屢々之を取替へな

とする御者は到底競争場裡の失敗者なる事を免れぬ人である。主人の中には雇人を見る事は丸で、器械を見ると同じ様な觀念を以て居る主人もある。金錢を望むの外は他に何等の目的もないと、此の様な考へを持つ主人は、雇人を侮蔑せる者であつて又人間を侮辱せる人である、金錢を得るのはもとより彼等が直接の目的であるには相違ないけれども、其の雇人等の感喜する時は金錢を忘れて主人の爲に働き、其の憤怒する時は又金錢を棄て、離れ去ることがある。苟くも之を雇用する間は、如何なる場合に於ても雇人は主人の補助者であり、又殆んど事業其物であるから、之を粗末にするのは、聽て己が事業を粗末にするのである、この意味に於て成功する程の主人は常に雇人を大切にせねばならぬ。雇人に於ても亦、自己の主人を

尊敬し服従して主人の利害は以て直に自己の利害と心得、主人も又雇人の利害を以て直に自己の利害と心得れば、兩者互に一致共力して、愉快なる中に營業に従事することが出来る。

けれども世には雇人の勞働を責めて其の利害を顧みない主人がある。斯の如き主人は遂に失敗することを免れ得ない。之に反し常に雇人の利益を圖るに意を用ふる主人は、雇人をして其厚意に感激せしめ而して自己の業務に精勵せしむるに至る。常に雇人を自由ならしめ愉快ならしめ其の業務上の妨害となる様な事柄を除去するのは取も直さず、雇人をして其業務に全力を専注せしめ主人自身の業務に大なる貢献を持ち來らするものである。斯くして雇人の將來と主人の將來とを一致せしめてこそ初て事業の繁榮は圓滿に行るゝのである。

人は意氣の動物であるから、頼むと言はれて倚り懸かゝられたる時は極めて眞面目な考を起す者である、如何なる無教育の職工と雖も若し主人より、「一に君等を頼む外なし、折角努力を望む」と、信實依頼せられた時は、必ず自任して奮發努力するに至る、此れ等は雇人を使用せんとする主人は大に注意すべき事である。

或る呉服店では店員獎勵策として、最初自分の手に掛けた客は始終自分の受持として扱はせて居る、そこで例へば新柄が出ると、各店員は夫れ々其の受持の客の中で需要のありさうな向きへ自分の名で以て勧誘の手紙を出す、若し取引が出来れば、夫れを扱つた店員は一定の歩合を貰ふ、此の制度は普通の歩合制度や賞與金制度と違つて、一層各自の個性を發揮する機會を與へられ、且つ更に大なる

責任を課せられる譯だから、自然彼等の熱心を刺戟する事になる、右の手紙を出す際に上役の檢閲を経なければならぬ事は云ふまでもないが、併し店員をして客と個人的接觸を保たしめやうといふのが此の制度の眼目である。大概の客、殊に婦人客は、何々商店といふ抽象的な者と取引して居るやうに感ずるよりは、能く自分の趣味好尚を解し、且つ自分の愛顧を觀面に認めて呉れる其の商店の何之誰といふ個人と取引するのを一層喜ぶものである。だらしない店で右のやうな方法を実行したならば、或は種々の弊害が起るかも知れないが、規律の正しい店ならば其の心配もあるまいと思ふ、斯の如き方法にすれば使用人も主人も金より大切な主人、金より大切な店員と云ふ様になるに違ひないと思ふ。

けれども今の世中は、何處其處へ婿に行くといふことになる、どの位先方が財産があるかと云ふ、娘の處へ行くのでなくして、金の處へ行く、婆さんは幾つになる、七十八歳だ、もう長いことないだらう、死ねば自分のものだ其じやア行かうかと云ふ風だから、金貨の爲め、銀貨の爲めに養子になるのだから冷たい夫婦、冷たい親子だ、主従亦斯の如しで、斯う云ふやうな冷たい金貨か銀貨の化物のやうな人間の多い時に、金より大切な忠兵衛さんと云ふ様な意氣ある人の少ないのを悲しむ。今の世の人には、此の意氣に富んだ人の爪の垢でも煎じて、毎晩一服宛飲ませたならば宜いだらう。ちやと云ふて私は決して情死を勧めるのではないけれども、商業其物と情死する位の意氣が畢竟男は女の爲め女は男の爲めでなくして、商業を以て苟

も世に立たうと云ふ人は、忠兵衛大切の意氣を以て、自分の商賣の爲めに金より大切の此の商賣、金より大切の御主人様、金より大切の奉公人、と云ふやうに、お互に金以外に思合ふところの尊い情操である、損をしても、得をしても、從容として笑つて、自己の商賣の爲めに働いてこそ、本當に商法家として世に立つことが出来るので、景氣が好ければ好いなりに、悪ければ悪いなりに、満足して暮して行くことが出来るのである。是れが出来ないと云ふことは、矢張り蠟細工の家同様な、蠟細工の鼻同様な蠟細工の髪同様なもので人目を胡麻化すと云ふやうな、誠の缺けた商法をして居る人で、何處まで進んで見ても、それは眞の商法とは云はれない、誠の遣方とは見られない。人間の後天的性能も恐ろしいもので、人目を胡麻化

すことも習慣になるとなるとも思つてゐない、普通の様に考へてゐるのみならず、嘔吐く位は何とも思はず寧ろ平氣に喜んで居る様な者もある。

□嘔吐く習慣を付るな

御伽話の様な話だが或る處に來客が二三人あつて、家族と食事を共にし、種々雑談を交へつゝある時、小さい女の子は母親に、

「阿母さん、私にもお酒を一杯頂戴な、」

「いゝえお酒は子供の飲むものではありません、お前は御飯をお上りなさい」と云ふと、其少女は直ちに母親に一矢を酬いた。

「だつて阿母さん、阿母さんは先達て胃の悪い時には少許りお酒を飲

む方がいゝとお仰つたではありませんか阿母さん、私は今日はお腹が痛いのですよ、

一座の人々は其少女の頓智を讚え、哄笑を以て之れを迎へた、子に甘き母親はこの悪頓智を心窃に悦んだのである。よつて直ちに少女の請を容れ、一杯の酒を與へた、少女の虚言は圖らずも其主張を貫徹せしむる事が出来たのである、母は少女の飲み了るを待つて、「嬢や、お腹が痛いのは癒つたの、えゝ癒りました、一座、再び哄笑の聲に充たされました少女の得意思ふべしである、是より以後、其の少女は機會ある毎に直ちにかゝる串戯交りの虚言を云ふて、己れの慾望を充たすを常とする様になり、遂には習慣となつて頗る虚言を巧にする様になつた、斯の如き悪癖は母親のみならず他人を瞞着

するに至り遂に一生の幸福を犠牲にするに至るものであるから、子供の頓智は、設令可笑的にして巧みであつても、之れに向つて喝采を與へ又は同情をするものではない、此れらは子供に對する誠の遺方とは見られない。西洋の進んだ人間は如何なるものか知らない、又東京や大阪の商法家の進み方は如何なるものであるか、それは知らないけれども、要するに商人の根本の道義、根本の動機と云ふものは至誠でなければならぬ、商法家の機關の運轉はお金の運轉であるが、その動機は至誠だ、至誠より金錢を使ひ、至誠より其道を行つて行かなければ、其の働き方と云ふものは本當でない、なか／＼此の機會を見ると云ふことは難しいことである、實際金は何處にでもあるけれども、至誠より此の機關を運轉して行く處に、金と云ふ

ものは行くものである。詰り商機禪機の其の機關長は主人公である。即ち本心である、此の本心に出でたる動き方は、皆な金と云ふ對絶眞理同様な機に觸れるだらうと私は思ふ、一時胡麻化して利益を得ても、それは永久に持續するものではない、至誠より出でたる行爲でなければ駄目だ、誠でなければ商機を體得する事も出来ないし、又特に禪機などは體得せらるるものではない。

第六 如何にして機會を體得するか

□ 啐啄の機

此の機會を體得すると云ふのは、茲に啐啄同時の機と云ふことがある、是れは禪の方でも仲々喧しいことであるが、斯う云ふ機會と云

ふものは又心懸けないと體得する事が出来ない。

啐啄同時の機、之れはどう云ふことかと云ふに之れは碧巖集にもあるが昔し徳川家康公が岡崎に居られた時分に、武田信玄が家康公に交際を求めて来た手紙の封書の裏に啐啄、と云ふ二字が書いてあつた、家康公何と云はれたかと云ふと「どうも此の啐啄といふ、二字が分らない」手紙に其の二字が書いてあつた、「何分宜しく、今後の御交際を願ひます」と云ふ手紙の裏書に、啐啄と書いてあつた、どうも其の字が分なぬ、其の時分伊勢の江南和尚と云ふ禪僧が来て居たから、一遍あの和尚を呼んで聞いて見たら宜からうと云ふので、教へて貰つた、和尚の曰く、「啐啄の啐といふ字は、雛が卵の中に居つて、將に出やうと嘴でコツ／＼突く時のことを云ふ、

又啄といふ字は、母鳥が卵を啄むことである、雛が時來つて今や將に殻を割つて出やうとする時、母鳥が之れを啄む、出やうとする、出さうと啄む、是れが即ち啐啄同時の機と云ふことであつて、時機を見ることが大切であるといふ意味になる、斯う云ふことを説明されたので、家康公大いに喜んだ、世の中の總べてのことは皆さうだ、戦のことも亦さうである、啐啄の機を失つてはいかぬ早ければ水だし遅ければ腐る、此の啐啄の機を見ることが大切だと云つて之れを心懸けた結果、家康公は此二字に依て戦争の機略の蘊奥を究め、多數の人を取扱ふことが大變上手になつたと云ふ話がある。只無茶苦茶に小言を云ひさへすれば夫れで人が聞くかと云へば、さう云ふ譯のものではない、泉聲中夜の後山色夕陽の時でなければ、

幾ら小言を云つても聞くものではない、朝から晩までボン／＼云ふて居つた日には、小言の効験と云ふものはありやしない。

□ 不平の習慣

「私の處の奥様程、奇妙なお方はありませんよ、恐らく「夫れで宜い」と仰つた事は生れてからないのでせうよ」と或る下女殿が、井戸端會議で、喋舌り出した、満場唯寂として、彼の演説のみが獨り聲高く響き渡つて居る、其の要領を摘めば次の通りである。

「御覽なさい、どんな旨いものを喰べる時だつて、おいしいと仰つた事はない、薬でもお上がりになる様に額に八の字を寄せて、苦いか、辛いとか、何とか難癖を付けるんですよ、やれ此の肉は硬い、

やれ此魚は腐敗つて居る、こんな不味い漬物は食べた事がない、此の御飯は焦臭い、こんな硬いのを喰べると胃が悪くなると始終御小言ばかりで、時々は御飯の半ばで御部屋へお引つ込みになることもあるんですよ、いくら大家から御出なすつたつて、あんなに我儘でおまけに悪い所ばかりに氣を付けて見て居る方は餘りありませんよそれもまだ宜いとしてね、先達慈善何とか會へお出でになつた時はそれこそ大變でした、和服にしやうか、洋服にしやうか洋服ではハイカラ過ぎる、和服では流行遅れだからつて、やがて一時間も小言を並べ、揚句のはてに御召をあらひざらひ出して、やれ此縞柄は田舎臭い、此色合は流行らない、此の洋服は身體に合はない、それもいけない、これもいけないつて怒り散し、やつと三時間もたつて御

出かけになつてから、こんどはお歸りになつて、又大變な御小言なんですよ、誰さんは厭な人だ、誰さんの奥様は氣障だ、もうあんな人と交際するのは懲りくだつて、一人でも御氣に召す人がないのですつて、それもまだ宜いとして、天氣が悪いつて小言を云つたり、寒いとか暑いとかいつて怒つたり、それこそ奉公人が見じめですよ、此間なんかも、暑にくくつて御怒りなすつて、奉公人に一日團扇で煽がしたんだつて其れも團扇の持ち方が悪いとか、ちつとも風がこないとかいつて、揚句の果てが奉公人を追ひ出すといふ騒ぎなんです」
下女の演説は斯くして終つたが、其の子供達はどうであらうと聞くと、此の奥様は以上の様な事を子供等の前でも平氣でやるそうであ

る、母の眞似をするのは子供の常で、毎朝起きる時などは、實に中々の騒で一人の子供は何か氣に入らないとて天地も裂けんばかりに泣き出せば、一人は足袋が見えないとて怒りだす、一人は帯を締めて呉れとて喚けば、他の一人はもつと寝て居るのだとて駄々を捏ね廻す、此騒ぎは起る時ばかりでない、朝飯、晝飯、夕飯の時なども同様である、

一人は、「おいお鍋！なせ早く食事の支度をしないのだ」一人は、「あゝ熱い、こんな熱い茶をなせ飲ませるんだ舌が焼けるぢやないか」、「おや〜此の魚は骨ばかりだよ、食べられやしない、おい早やく給仕をしないか、早く〜」、その騒々しい事一通りでない、彼等が喚き草臥れて寝ない間は、丸

い家中が轉倒へりそうな有様であると云ふ、流石の奥様もホト〜いやになつて、或時子供等を呼んで云ふには、「なせ御前達はそんなに我儘なのです、貧乏人の子供を御覽なさい、毎日御香の物ばかりで御飯を喰べても小言は言ひません、若し之れから行儀を直さないと酷い目に遭えますよ」と然し子供は依然として我儘で、依然として不平不満で、常に膨れ上がつて騒いで居るそうである。こんな工合で、いつも母親が不平ばかり云つて居ると、子供に小言を云つても決して効験の有るものではない。是れはいかぬと思つた時にバツと怒る、さうすると怒つた効能がある、例へば子供がピストルか何かを持つて悪戯をして居る、聲をやさしくして「コレ〜ピストルを持つて悪戯をしてはいけません、

危あやない、怪我けがをしますよ」と云つたつて、なか／＼離はなすものでない、是れは矢張やばり啐啄ちたく同時じの機き會くわいを見なければならぬ、ピストルを翹たつて居をる、危あやないと思つた時に、大聲疾呼おほこゑしつこ「コレ危あやないッ!!」、パツと離はなす斯かの如ごとく啐啄ちたく同時じの機きと云ふものは、其間そのあひだに毛筋けすぢほどの隙間すきまも許ゆるさぬのである、早はややければ水みづだし、遅おそければ腐くさる、泉聲いづみこゑ中夜ちゆうやの後のち、山色さんしき夕陽ゆふやうの時とき、其機そのき會くわいを見ると云ふとは、何處いづこから出て來こるか云つたらば、子供こどもが亂暴らんぼうをして居をる時に、母ははたるもの、父ちちたるものが大喝かつ一聲せい、「危あやないッ」と云ふ、この一聲こゝろの中に矢張やばり親おやたるものが子供こどもに對たいする至誠しせいが籠かつて動うくのである、此この一聲せいを掛かけたる時とき子供こどもはパツと離はなす、此この間髪かんぱつを入いれざる機き會くわい呼吸こきゅうは至誠しせいより出でた聲こゑでなければ斯かうはいかぬ、是れが大切たいせつなことである、故ゆゑに始終しじゆう至誠しせいが充みち

切きつて居をる、誠まことの精神せいしんが充實じゆじつして居をるならば、糸一筋いとすぢを取扱とらつかふ上うにも全身ぜんしんの至誠しせいが働はたらき觸處しよくじよ々々々々に脈絡みやくらくたる生命せいめいが漲みなり、することなすことに従したがつて當意たうい即妙じやくめうの活作くわつさく略りやくが表あらはれ啐啄ちたく同時じの機き會くわいを掴つかむことことが出来できるのである。之これが即すなはち萬仞ばんじんの功こうも、篋きに始はじまるの謂いひで糸一筋いとすぢでも大切たいせつであると云ふ所の眞心まごころがあるならば、必ずかならず其處そこに至誠しせいが現あられて聽やがては自己じこの將來しやうらいを大成たいせいせしめるのである、斯かく觀くわんじ來きたれば誰たれそれが賞ほめるだらう今は景氣けいきが好よいからこの位くらゐのことはしても宜いいだらう、と云ふやうな薄情はくじやうな考かんがを以もつて手先てまきを動うかして居をつては駄目だめである、「ヤレ危あやない」と云ふ此この啐啄ちたく同時じの機き會くわいを以もつて、眞心まごころより出いる、誠まことを以もつて事に當あたらなければ駄目だめだ、一旦たんやく約束やくそくをしたならば、たとへ火ひの中なかに入いつても、水みづの底そこに入いつても、腑仰ふぎやう天地てんちに恥はぢない至し

誠を以て、約束を實行すると云ふ所の精神こそ、商法家の本領にして勤むべき第一義だらうと思ふ、如何に世の中が進んでも誠の本領と云ふものは、古今不易のことである、是れに就て面白い話がある。

□ムールの蠻人

是れは野蠻人の話であるが、ムールと云ふ人種があつた、或る日の黄昏、此のムール人の會長が公園地で遊んで居ると、出し抜けに西班牙人が駈けて来て、

「どうか助けて下さい」と云ふ。西班牙人はムールに比しては文明人である、進歩して居る。ムール人は野蠻人種だ、野蠻人の會長に向つて、「私は今人を殺したので、大勢に追駈けられて困つて居ります

どうか助けて下さい」と云つて頼んだから、會長は暫く瞑目して神に禱を捧げ、さうして、「宜しい、助けて上げませう」と、それから其の男をば自分の家の裏座敷に隠して、「今にやつて來るといけないから、明りを照けるのだけれども、お前の影でも見えると又騒しいから、靜かに此處に隠れてお出なさい、其の内に夕飯を差上げませう人が寢靜まつてから、危なくない方の道からお前さんを國許まで送つてあげやう」と云つて匿つて置いた。暫く經つと部落の者がやつて來て、「氣の毒なことが出來ました、あなたの家の一人息子が斯んな有様で殺された」と云つた、村中の野蠻人達が戸板に載せた死體を擔いで來た。見れば誰あらう、十六歳になる只つた一人の可愛い息子だ。現在我が子を殺したのは、あの西班牙人だ、西班牙人が自

分の息子の腕輪を持つて居つた、殺して置いて腕輪を引ッ奪つて逃げたに違ひない、我が子の敵と知らず「助けて上げやう」と云つた今日の状態とは違ふのは勿論なれど、日本人の今日の有様から想像したら、思ひも寄らぬほどの大問題だ。然るに此の會長は、「さうであつたか、それはどうも可愛いさうなことをした、お前達も御苦勞であつたと、云つた限り、一言も今其の西班牙人ならば自分の家に入れてあるといふことは云はぬ。「何れ又お前達の世話にならうが、今晚は俺の方で預つて置くから、お前達は疲れて居るだらうから歸つて呉れ」と、其場は歸して置いて、さうして其の會長は西班牙人の所へ行つて涙を流して云ふた。「お前は今人の子供を殺したと云ふから、他の子供と思ひの外、現在可愛い我が一人の悴を、お前が手に

掛けて殺したのだ、其の持つて居る腕輪は俺の悴の腕輪だ、八ッ裂にしても尙足らぬけれども、今一旦神に誓つて、お前を助けてやらうと云つたのだから、俺は其の言は撤回致さぬ。一旦助けてやらうと云つた言葉は其通り實行する、神に實行すると云つて誓つたのだから何處までも實行するが、お前も淺間しいことをして呉れた」と云つて、どうだらう矢張り約束通りに、鄭重に晩食を振舞つて、國許まで送り返した、偉い奴である、現在我が子を手を掛けた男が前に居るのである、けれども一旦助けてやらうと、神の前で約束をした言葉に對して、此の約束を違へては濟まないと云ふので約束通り鄭重に取扱つた。普通のものでは出来ぬことである。之に依つて思ふに、利己的な無道義な者は、此の會長の所爲に對して非常に損な

馬鹿律義にも程があると批難するかも知れぬけれども之は小なる考
 で徹見の明なきものと云はねばならぬ會長は本當に損害をした、一
 人の子供を棄て、了つた、其の子供は殺された、そして永遠に其の
 子は歸つて來ぬけれども、會長の此の所爲に對して 何者か酬はね
 ば世界は暗である。果して其の西班牙人に對して約束を實行したと
 云ふ所から、西班牙人はそれを見て怨に報ゆるに却つて大なる恩義
 を蒙つたのだから、何等か之れに報ゆる所がなければならぬと云つ
 て、それから、ムール人と特約をして、非常な貴重な品をば何十臺
 と云ふほどの荷馬車に積んで、ムール人の所へ之を送り、さうして
 盛に商業の發展をするやうにしたと云ふことである。之は偏に其の
 ムール人の會長が約束を實行したに依ることである、可愛い我が子

が殺されたに拘はらず、神に一旦誓つたのだから之を反古にすること
 は出來ないと云つて、飽くまで其約束の通り實行した、仲々に彼は
 誠心の堅い男である、此の挿話も約束通り實行する男であるといふ
 ところから、遂に左様な大なる利益を得たと云ふお伽噺であるが、
 是等は矢張り此の至誠より出でた働きである。商業の機會と云ふも
 のは至誠より出でて、此の機關が運轉するのでなければならぬ、機
 關は金だと思つたならば、金の使方が至誠より出でて、使はなけれ
 ばならぬ、至誠より出でた所の働きでなければ、本當の働きとは云
 ひ得ない、即ち禪機を知る人とは云ひ得ないのである。禪機と云ふ
 ものは必ずしも木に竹を繼いだやうな頓珍漢なことを云ふのではな
 い、禪機は矢張り痒い所を自分の手で搔くが如きもので、何とも云

へぬところの悟り、理窟で以て云ふことの出来ない誠より、
 ころのものを、禪機ある人と云ふのであります、
 商法家も亦至誠より出でて働くところを以て商機を體得したといふのであります、
 其の機會は泉聲中夜の後、山色夕陽の時、
 啐啄同時の機でなければならぬ、
 恰度此の響と云ふものは味へば面白いものである。
 扇子で机をポンと叩けばポンと音がする、この音がするといふことは、
 扇子と机とが離れて居つてはいかぬ、
 少しでも離れて居つたならば音はしない、
 扇子と机がポンと觸れ合ふ啐啄同時の機の所に於て音を發する如くに、
 ポンと叩くこの誠、
 之れが金錢を手に入れるにも又眞理を體得するにも、
 此の僅な啐啄同時の機會を造るものであるから
 至誠以て其の仕事に勵むことが尤も肝要なことであると思ふ。
 故に

諸君も少々景氣が好いからと云つて、
 お客さんを輕蔑せぬやう、
 景氣が好いからと云つてお客さんを胡麻化さぬやう、
 増長せぬやうに心掛けて、
 景氣の好い裏には不景氣といふものが附き廻つて居るといふことを忘れていけません、
 何時不景氣の風が吹いても風邪にかゝらぬやう、
 青菜に鹽の顔付をしないで済むだけの元氣と覺悟とを今から養つて置くと云ふことが、
 即ち其儘商機即禪機ある修養法である。

第七 商道と佛道

商道と佛道、
 即ち商人の行くべき道と、
 吾々佛教修行者の行く道と

は違ふものであるか或は同じきものであるかといふことを考へてみるが宜しい。大抵この商業に従事してゐる者がよく私共に云ふ事だが、吾々のように商買して居るものは佛法の修行は出来ません、お釋迦様の教に背くことが多い、故に私共は佛法を信仰するといふことは不釣合である」と、斯ふ云ふ考の者は頗る多からうと思ふ、併し之は大に誤れる考で商業を營むもので若しこの佛道の妙味に外れたならば、その商法家は本當の商法家であるとは云はれない、然しこれは商法にもいろ／＼あるし、また佛道にもいろ／＼あつて、殊に室町時代とか、または源平時代などには、世の中で失敗をした人は世の中を味氣なく思ひ誤つた消極的な無常觀よりして山へ入つて、さうして一切現世の慾を捨て、行ひすました者が少くなかつた、一

體、僧侶の仕事、佛道の仕事は慾を捨てる修行である、又商法家の行く道はなるべく、安いものを高く賣つて金を儲ける、それゆゑに大いに佛教と商業と違ふと思つて居る者があるが、之は大變な間違ひだ、それはこの吾々如き出家沙門の身の上はお經にも書いてある通り、販賣、貿易をすることはいかぬ、鶏を飼ふことも、犬や猫を飼ふことすら、禁じてあつて、左様なことをすれば破戒僧などといはれる身の上であるが、これを諸君まで皆この通り、販賣、貿易をすることはならぬ、金儲けをしてはならぬといふ佛の教をその儘に實行して行つたならば、世の中に佛教ほど害になるものはない、其所が即ち活眼を括き、活教典を利用して體現する必要な點で、徒らに佛教の形骸を擁するやうなことではいかぬ、道に元來出家在家の

別道はない禪にも亦在家出家の兩般はない。要訣は眞理即ち至誠にある、故に商業を營むものは、無暗矢鱈と人の利害は構はずに、自分さへ利益をすればよいかといふならば、それでは成功は出来ない。

□賣つて喜び買つて喜ぶ〓佛道

商道の一一致

たびくいふことだが、賣つて喜び買つて喜ぶのでなければ成功するものではない。一文でも餘計取ればよいといふやり方ではないけな。賣る方でも損をしないばかりでなく、買った人も、これなら成程値打があると思ふ、さう思はせるやうでなければ本當の商賣とはいはれぬ自分を得し、向ふも得する、賣つて喜び、買つて喜ぶ即ち

啐啄の機といふやり方が本當の商法である。佛道亦然りで、佛の道といつても多岐多様で、一々云へば長うなるから云はないが、此の佛といふ一字だけでも分る、佛といふのは、印度では佛陀と云ひ、支那では覺と云ふ、尙ほ詳しく云へば自ら覺り他を覺らしめる、自覺々他、もう一つ語を換へていふと自利々他、これが即ち佛である。どうして佛を覺といふかといへば、自分の覺つた力を以て人に覺らせる、それを語を換へていふと、自分が利益を得た餘りを以て人に利益を與へる、斯う自利々他の兩者圓滿に進んだのを以て佛といふ。此の意味合が眞實の佛といふのである。

商法も亦その通りに違ひない、自分が利益を得て、他にも便利を與へるから、其の商店は繁昌するのである。自分さへ利益を得れば他

人はどうでもよいと云ふ風でやつたならば駄目だ。自利々他圓滿ではない、店へ来た人に一厘も惜しいと思はせない、百圓の代物を百十圓でも惜しいと思はせないといふほど旨くやるのでなければ駄目である。八拾圓の値打しかないものを百圓で賣つた。いかにもその場は自分で儲かつたような氣持がするけれども、どう見てもそれは矢張り、八拾圓だけの値打で、貳拾圓は暴利だ、それでは一時は愉快かも知れんが、商法家として成功したものでない。澤山な利益さへ得れば商法家が成功したといふならばいざ知らず、凡そ人間としての成功といふものは、自分のみが利益を得たことを以て成功といふことは出来ない、演説をするものが、ウンと一つ場當りをやつて大向ふを唸らせたなら、それは演説としては成功だ、學生が學校を卒

する學生としては成功だ、卒業しようといふ一つの目的を達して、苟くも一人前になつて社會に出ることが出来るのだから、學生としては成功したといへるが、それでは人間の最終の成功とは云ひ得ない、自分の利益さへ得れば成功だといふことは出来ないことは私がいふばかりでない、總べての人がさういふて居る。人としての成功は自利の成功だけでは駄目だ、自利の點に於ては成功だが、人間としての成功とはまだいへない。金を澤山擱んで己れのものにした、それだけでは駄目である、金を擱んで自分のものにしたといふことは一の成功だろうが、しかもその金を集める手段として、多くの人に迷惑を掛け、その結果金が出来たといふならば、やはりそれは金を集めるといふことに就ての成功者であつて決して眞の成功者では

ない。百萬の富を得たりと雖も、それが鰥寡孤獨を泣かせて集めた金であるならば、それは金を取る上に於て、成功者とは看做さぬといふことを西洋人はいつて居る、して見ると、商法家の行く道も、出家沙門の行く道も矢張り同じことだらうと思ふ、恐らくは商法家が自分さへ利益を得れば他は顧みぬといふことならば今は如何に盛であつても、決して成功する氣遣はない、失敗に終るに極つて居る佛道に於ては、自ら利益を得て、他にも利益を與へるといふ所に佛道至極の妙理があるので。商法家もその通り、自利々他の道を少しでも外れて居つたならば、それは矢張り商法家として當然の道を行く人ではない。今、若し人に就いて云へば、丁稚奉公をして、一人前になるまでの修行と、吾々僧侶が、一人前の僧侶になるまでに種

種苦勞する徑路は同じことだらうと思ふ。志は大でなければならぬけれども、さりとして若い小僧が、自分は味噌摺がしたさに坊主になつたのではないと、小僧の時に怒つて、疝癪を起して家へ戻つても仕方がない、俺は摩珂般若婆羅蜜多などを習ふ積りぢやないと駄々を捏ねてもいけない矢張り順序を逐ふて遣らなくぢやならない、丁稚奉公をして商人の行く道を行つて、一人前の店員となるのも、吾々が佛道の修行をしやうと云つて師匠と頼んで出て来たその人に就て修養することも同じことで、志は遠大でなければならぬけれども宜しく此の日々勤めて行くところにて、前途に光明のあることを考へて往かなければ、吾々宗教家も成功することは出来なければ、また商法家も眞の成効は覺束ない。

□ 何にか道といふ

道と云ふても色々な道がある、蚤の這つて行くところも道なれば、虱の這ふのも道である、馬の歩くのも道、虎の歩くのも道、道に色々あるが、商法家の行く道と、出家沙門の行く道と、道は二つにわかれては居る様だがそれが結局に於ては一つであるといふことは無論であるそうして小道はいろいろに岐れて居るけれども、根本の大道に於ては只一つである、これに商法の道、佛教の道と區別のつけられやう譯はない、老子の如きは、「道ノ道トスベキハ眞ノ道ニ非ズ」と云つて居る、これが道だといふならば本當の道でない、名けやうがないから仕方なしに道といふ名をつけて居るけれども、これが道

だといふならば、本當の道でない、天下が紊れて君に忠、親に孝といふ名前が附いて来る、紊れるから忠臣といふ名前が出来て来るのだ、本當は、「敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花」、別段教へなくとも天地自然の道といふものはチャンと存在してゐる。又佛の道は斯ういふことをいつて居る、修することもなく、作すこともない、證ることもない、而して最上最善のもの、之を名けて道といふと斯ういふ意味の語で云ふて居る、前の説と能く似て居ると思ふ。覺ることもないければ、修めて得られるものでもない、無修無證無作であつて、しかも最善最良のものが道であるといふのである、實際この道といふのも、根本の大道に至つては説明の限りでない、それは禪宗の問答にもたび／＼よく引合ひに出ることである。

趙州和尚といふ人に、「如何なるか是れ道」といつて尋ねたら、「垣根の外に道がある」斯ういふ答だ、「そんな小さな道は尋ねません」、「それぢやア何を尋ねるか」僧云く、「大道を問ふ」、「ナーンだい大道か」
 「俺は又近道を尋ねるのかと思つた」、大道ならば長安に透る即ち三條通を真直に東へ行けば東京へ行ける、西に取れば長崎に出る、斯ういふ挨拶を致した實際、道といふものを尋ねて見ると、どこに道があるか分らない、これといつて道は捉へやうがないけれど、このミチといふ語は日本に限つていふことで、ミチキル、充滿するといふこと、充ち満ちて居るといふところが本當の大道である。實際、道といふものゝない處はない。諸君が座敷に坐る、尻の坐つたところが道だ、鼠が傳ふ、それが道である、道と云ふものはどこにある、

遠くにもある、又近くにもある、これを遠くに求めるといふやうにさう鹿爪らしく求めなくとも、手近いところに道はある、道の道とすべきは常道でない、道は名前の附けようがないが、人間は朝から晩まで少しでも道を外れることは出来ぬ。だから高島嘉右衛門と云ふ人は斯う云ふことをいつた、あの人は随分勝手な面白い説明をして居る、道といふ字は首に彳が書いてある、彳は走ると云ふ意味だ人間が道に外れると首が走る、それぢやから斯う書いて道と讀ませる、道に外れると首が走る、首が飛ぶ、斯う云ふのだが、人間が道に外れたことをすれば、首の飛ぶ前に、第一信用が飛ぶ、身上が飛ぶ、終には首が飛んでしもう、それで商人の行く道も、佛教者の行く道を正しく行けば、間違はない、佛教者と云つても私共はか

りをいふのではない、古の佛道を修行した方が、辿つた道を、商法家が迷はず辿つて行けば、シツカリした商賣が出来る、これも商人ばかりに限らない、政治家もさうだ、教育家また然り、何でも同じことだ、恐らくは商法家が親切を欠いて商をするならば、どのような店飾をしても、立派な廣告をして見ても、必ず成功する氣遣ひはない。

□ 金儲を商法の根本

原理とするなかれ

只儲けやう、利益を得やう、自分さへ金が出来れば宜い、株券が上れば宜いと云ふやうな考で商をする、さうして損害を招いたならば

失敗をしたならば、其の人は精神的に自殺をしなければならぬ、勝負は時の運で、商賣をやつてゐる間には年中利益ばかりあるものではない、儲かる時もあれば損をする時もある、それは時の運で仕方がないが、儲けることばかりを根本原理として居るならば、これは必ず失敗すれば、其の人は精神的に自殺をして居る、身體は生きて居つても、心が死んで居る、世の中のことは一勝一敗、一得一失で一利一害は免れぬものだ、只自分は商の道を真直に辿つて行くといふ考であるならば、損益の打算といつたつて大抵極つて居るものだ時期に應じて損をすることもあれば儲かることもある、これは已を得ない、只々澤山な金を得さへすれば宜いといふならば、實際人間は淺薄なものだ。凡そ商法家で利害を打算せずによつてゐる人はな

い儲からない仕事を承知しながらやる人もない必ず儲かるだらうと思つてやるに違ひないけれども、時に依つては儲かり、或は時に依つては意外の損失を招く如きことがある。けれども其所は仕方がない。それが即ち商法である斯ふ云ふ様に商法も其の結果が豫想通と必然的の者でないから、其の方法手段、即ち商業道の最善なるものを辿り、出来得る限り満足な結果を見ねばならぬそこで商法家の行く道も佛教者の行く道も、道は同じであることを辨ねばならぬ。佛教者にして、若し、商法家の道を知らなかつたならば、佛教者としては成功して居ない人である、又商法家でも、佛教の道を知らぬ人は、只無茶苦茶にやつて居る人で、本當の商業の道を知らん人だらうと思ふ。佛教中の鎖末な一部分の厭世主義とか、未來主義とか、

現世はどうでも宜いといふやうな曲解し易い(そこで大なる世間的積極的釋義はあるけれど)一部の言葉をとつて誤つたる考をしては仕末におへぬけれども、道を極めて見れば、畢竟同じことである、同じことは分つて居りながらどうも、其の行きかたが難しい。

□ 商人は商人臭くせよ

學者の學者臭いも宜しからず、坊主の坊主臭いもいけない軍人の軍人臭いもいけない、只特に町人の町人臭い、實業家の實業臭いのはどふも奥床かしい、坊主の坊主臭いのは、どういふ臭ひがするか、自分ながら分らないが、學者の學者臭いのは氣障なものだ、財産家の財産家臭いのも鼻につく、只、商人の商人臭いのは非常に奥床しい